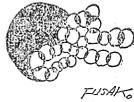


人物を中心とした

## 文化郷土史

—茨城県—



室 伏 勇

## 一 概観

茨城県は「美術県」としてなかなか有名である。近代美術史上に大きな足跡を残した日本画家の横山大観、陶芸家の板谷波山を頂点にして幻想的な水墨画の小川芋銭、洋画の中村燐、熊岡美彦もみな茨城県人である。昨今では二科会の服部正一郎、東光会の森田茂、日展水彩の小堀進、日展工芸（彫金）の海野建夫と四人が日本芸術院賞に輝いている。在野の雄として彫塑の木内克がおり、幼少から中学時代を水戸に過ごした洋画の辻永がいる。このほか現在の美術界を支える多くの美術家たちがあすを目ざし鋭意努力しているが、すでに新進群から後代への芽生えが生まれている。高村光太郎賞の彫塑家一色邦彦、シンポジウムに活躍する石彫の富樫一、個性表現を旨とする二科会洋画の吉田正雄、国際青年美術家展大賞の寺門晃らがある。このような層の厚さが茨城県を今日「美術県」とらしめている大きな土台ともいえるのである。

近代以前にさかのぼってみると、室町水墨画の画僧豊村周繼（元正〇四年—元正一五八九年）が常陸太田地方より出ており、江戸時代には水戸藩士の文人画家、立原杏所（天明五年—天保十一年）、型破りの水墨画をものした町人画家林十江（安永六年—文化十年）が共に水戸から出ており、また古河城下からは狩野派の卓抜した技巧の持主である奇行の画人河鍋曉斎（八三—一八八九）、東都第一流とうたわれた女流南画家奥原晴湖（天保八年—大正二年）が出た。米どころの稲敷郡新利根村からは歴史画の大人松本楓湖（天保十一年—大正十二年）が出ていた。また水戸城下は京都とならんで金工の盛んな土地であり、「水戸彫」と

称された水戸派金工の伝統は今日まで綿々と継続されている。このように近代以前にもすぐれた美術家がこの茨城の風土より輩出してたのである。

文学面で見ても、水戸藩は「大日本史」を中心にした修史事業が盛んで学問を愛した土地であり、また古河、土浦などの城下町にも文雅を愛する人々が多かったようである。近代文学は茨城県の中でも主として県南西部の平野地帯に活動の盛り上がりが見られ、長塚節、横瀬夜雨などを生んでいる。このようなことはやはり風土とは無縁でないことを意味しているように思えるのである。

## 二 美術

茨城県の近代美術は、明治三十九年の日本美術院の五浦移転によってその歴史がはじまるといっても過言ではない。日本画の革新をはかるために線を取り去るといって「没線主彩」の描法を取り入れた美術院の中軸画家の絵画は、残念ながら当時の世には受け入れられず朦朧画の非難を浴び、その結果美術院の経済的な面にも破たんを来たすようになり、再起を期して指導者岡倉天心の別荘のあった五浦へと「都落ち」したのであった。この五浦に移住して制作に明け暮れた作家は、横山大観（明治元年—明治三十三年）、菱田春草（明治七年—明治四十四年）、下村観山（明治六年—昭和五年）、木村武山（明治九年—昭和七年）の四人の画家があるが、それに岡倉天心がポストン美術館の仕事のためアメリカに滞在している時期を除いてはこの地の別荘にあり、指導を怠らなかつた。五浦というところは茨城県の北端に位置し、断崖にとり囲まれた五つの入江をもち太平洋の荒

波が押し寄せては砕け散る男性的な景観に満ちていた。美術院が移転した当時は、周囲には人家らしいものほとんどなく、町から二、三キロも離れた辺境であった。天心ははじめ人からすすめられるまま草野（いわき市）に別荘地を求めようと美術院研究生だった飛田周山（多賀郡出身）に案内させ、明治三十六年に草野の浜におもむいたが平板な白砂青松の海岸が気に入らず、帰り道に五浦を訪れてみて男性的な海岸美に感嘆し、すぐさま購入斡旋を依頼したほどで余程気に入ったらしかった。そこへ天心は別荘を建て、読書や思索にふけり、愛用の釣り舟で沖釣りを楽しんだ。この地に美術院を移転することになろうとは当初思いもよらなかつたことであるが、茨城県にとって美術院移転後の天心一派との結びつきは大きな意義を持つことになるのである。

五浦移住は家族ぐるみであって冷雨の降る十二月のある日、峠を越えて五浦にたどりついた一行はまさに都落ちとしかたえようがないくらいいわびしいものであったという。住居は天心別荘を中心に、入江を隔てた北側に大観、春草、南の断崖の上に観山、武山宅が建てられ、美術院の研究所は大観宅よりさらに北へ入った小松林にとり囲まれた蛇頭岬の断崖上に設けられた。四人の画家が毎日この研究所に通い、海と向い合って座り、制作に励んだのであるが、朦朧画のそしりを受けて逃れてきただけに絵はなかなか売れず、生活もひどく困窮した。中でも急進派の大観、春草は見るも無惨であり、魚の豊富な海岸に住んでいながら魚一尾買う金もなかつたというほどのどん底の暮しが続いた。しかしここでくじけてはならないと頑張り通し、明治四十年第一回文展に大観は審査員に迎えられて

「二百十日」「曙色」を出品、春草は「賢首菩薩」で二等賞、観山は「木の間の秋」、武山は「阿房宮劫火」で三等賞とそろって好成績を収め、美術院の健在ぶりを世に示すことが出来、みごとに再起を果たせた。その後、春草が眼病をわずらい、大観邸が火災にあうなどしてこの五浦時代はわずか数年で終ることになるが、このような苦難を克服してただひたすら絵画の創造に邁進した各作家の精進ぶりは実に立派なものであった。

四画家のうち大観は水戸、武山は笠間の生まれで共に茨城県人であったことも重要な意味を持っていた。大観は天狗・諸生の闘いのさ中に水戸藩士の家に生まれ、水戸に幼少を過ごしたのち父に伴われて東京に移転し、明治二十二年 東京美術学校創設と同時に入学している。在学中実技の成績はすぐぶるよかつたことが卒業制作の「村童猓猿翁」でも知られる。美校を卒業してからは京都、奈良等で古画の模写にたずさわったのち母校の助教となり、明治三十一年に美術学校長岡倉天心排斥の内紛が起り、天心が非職を命ぜられると天心に殉じて辞表を提出し、最後までこれを撤回せず懲戒免官



横山大観

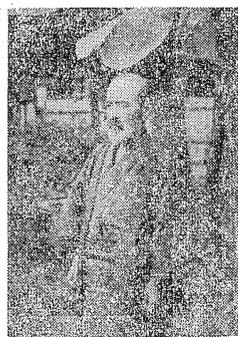
となった。その後は天心の主張する日本美術院の創立に当たって中心的なメンバーとして活躍し、同年七月に開院と同時に正員となり、評議員も兼ねて院の幹部となった。第五回絵画共進会と併合

して開かれた第一回美術院展に、天心の姿を歴史の人物をかきり象徴的に描いた「屈原」を出品、春草とともに「没線主彩」の新技法を力強く推進し革新の意気を燃やしたが、当時の保守頑迷な画壇には受け入れられず、「朦朧体」として排斥された。当然生活に窮するようになったが、美術院もまた非難を浴びて経営が行詰まり苦境に立つことになった。このような時期に天心のすすめによりインドへ、そのうちアメリカ、ヨーロッパへ春草と渡り、大いに画材を探り、彼の地の美術を学んだが、欧米への旅では大観、春草二人展を開催して多大の評価を得て得意満面であった。しかし日本へ帰ってみると美術院は惨たんたる有様で、ついに天心の意を受けて五浦移転が敢行された。その話を最初に天心より相談を受けたのは大観で、当時再婚して池の端に新居を建てたばかりだったが一も二もなく賛同したのであった。ただ五浦で待っていたのは生活の苦しさであった。「特に朦朧派の本家といわれていた私や菱田君の生活は、とてもひどいものでした」（大観画談）と語っているように今日では想像も出来ないようなみじめさであった。どうにかそれを乗り越えて制作に励み、「二百十日」や「煙月」「凍月」を描き、火災後再建した家でインドの旅にモチーフを得た「流燈」をこの五浦でものにした。春草、観山らと共に秀作を発表して美術院派を再認識させたのである。天心が大正二年に没すると、その遺志を継ぐべく自ら柱となつて美術院を再興、天心没後一周忌に開院の運びとなつた。たまたまこの年文展の審査員により大観が除外され、観山が文展審査員を辞退して再興に馳せ参じたこともあって、それ以来在野精神を貫くことが美術院の主張となつた。大正十二年の第十回院展に長

さ四十五メートルに及ぶ水墨の大画卷「生々流転」を出品、ちょうど開会した直後に関東大震災にあり、わずか数時間しか展示しなかったといういわくつきの作品だが、今日重要文化財に指定され、大観の代表作となっている。昭和五年にローマで開催の日本美術展に出品した「夜桜」、十一年の第二十三回院展に出品した「野の花」など秀作も数多く、同十二年に初の文化勲章を受けた。大観はいかにも水戸ッポらしく剛氣一徹のところがあり、千万人といえども吾行かんぐの気概に満ち満ちていた。常に新しさを求めてやまなかった九十一一年の生涯は、非常に波乱に富んだものではあったが、近代日本画史上にさん然と光輝を放っている。

武山は焼きもので知られる笠間に生まれ、東京美術学校を卒業、橋本雅邦に師事し、のち日本美術院正員となり、五浦に苦難の時代を過ごした。「阿房宮劫火」で明治四十年の第一回文展に三等賞を飾り、四十三年の第四回文展にも「孔雀明王」で三等賞を受賞するなど早くから練達した画技を見せ、殊に仏画をよくし、晩年には郷里の笠間に大日堂を建て堂内を自筆の仏画で飾った。

このようにして茨城県とつながりを持った日本美術院の作家たちであったが、その後も結びつきは深く、大正六年には牛久町に住みカッパなどの漫画や幻想豊かな絵を描いていた小川芋銭(明治元年-昭和十三年)が大観の推せんによって日本美術院正員を迎えられ、土くさい田園詩情や妖怪な幻想を描き、新しい南画の世界を拓いた。大正八年第六回院展の「樹下石人談」、同十年日本美術院同人アメリカ巡回展の「水虎とその眷族」「若葉にむさるる木精」などに水魅山妖の世界を描き、昭和七年と十一年に制作した二つの「桃花源」に



小川芋銭

自然美に満ちた理想郷を描いた。晩年の代表作であるこの「桃花源」は書と絵が渾然一体となった。旅をこよなく愛し会津、丹波、銚子などはいずれも長期にわたって滞在したが、何よりも芋銭が愛したのは牛久沼の自然であり、牛久沼があつてこそ芋銭絵画は生まれて来たといえる。

日本美術院と茨城県とのつながりでもう一つ重要なものに大正十二年から水戸市で開かれた茨城美術展がある。美術院評議員だった文学博士齋藤隆三(守谷町)が大観に相談して企画をまとめ、顧問に齋藤のほか大観、武山、芋銭らを置き、顧問の審査によって優劣がつけられた。これは日本画のみの展覧会でははらき新聞社が主催し、隔年に開催された。顧問自らも力作を出品したため大きな刺激となり、この展覧会より小林葉居人(新興美術院常任理事)らが輩立っていった。

洋画を見ると、日本画と劣らないくらい人物が出てくる。初期の草分けの一人としてはロシアの宗教画を導入した女流の聖像画家、イリナ・山下りん(安政四年-昭和十四年)がいる。彼女は笠間藩士の家に生まれ、生来勝ち気で絵が好きだったため十六歳の時に家を飛び出し、浮世絵師などについたが満足せず、西洋画の中丸精十郎に入門し、のち明治九年にわが国に初めて誕生をみた官設の美術学校で



中村彝

ある工部美術学校に入學、洋画を学んだ。イタリアから招へいされた教授フォンタネーシらの指導により西歐式の教育を受けたのである。在学中にギリシャ正教ニコライ司教の洗礼を受けて聖名「イリナ」をもらい、明治十三年に同美術学校を退校、ロシアのペテルスブルグ(現レニングラード)の修道院に留學し、二年余にわたって宗教画を習得した。帰国後ニコライ堂の壁面をはじめ多くの聖像画を描いた。ニコライ堂壁面は大震災で焼失したが、北海道函館市のハリストス教会、秋田県大館市の曲田福音堂、千葉県八日市場市の須賀教会などより遺作が発見されており、明治美術史の空白を埋めることになろうと注目されている。

大正期以降に活躍する洋画家では、まず中村彝(明治二十年-大正十三年)をあげなければならぬ。大観と同じく旧水戸藩士の家に生まれ、幼少時代に上京し、軍人を志望し、幼年学校に入ったが肺結核にかかり中途退學、療養中に絵を習いはじめ画家を志した。幼くして両親を失ない、二人の兄、祖母を相次いで没し、孤独の身となったが、その不幸に耐えてひたすら絵に生きようとした。はじめ白馬会洋画研究所に入ったが、指導者の黒田清輝が生徒の指導に不熱心だったため嫌気がさし、新帰朝の中村不折がデッサンを重視して教育していた太平洋画会研究所に転じ、この時代の無二の親友であった

中原悌二郎とともに制作に青春を賭けた。明治四十二年の第三回文展に初入選、第四回文展に「海辺の村」で三等賞、第四回文展にも「女」で三等賞を受賞し、彗星のように画壇に頭角を現わした。このころ若い女性との恋に悩み、また結核も悪化をたどり苦しんだ。レンブラントの作品に自然の悠久感を見、ルノアールの作品に韻律と官能の極致を発見していた。「私はルノアールを極度まで崇敬しております(芸術の無限感)と語り、セザンヌやロダンにも心を奪われた。こうしてルノアールを熱烈に愛し、それらの鼓吹によって第十回文展特選をとった「田中鶴博士の肖像」を描き、第二回帝展に出品された傑作「エロシエンコ氏の像」を生んだ。みごとに生かされたルノアールの筆触と韻律は深い感銘をもたらさずにはおかなかった。その後ゴシック建築の荘厳さにひかれ、立体派を学び、「ドクロを持てる自画像」を描いた。そして大正十三年にしみじみとした情感を伝える「老母像」を残して三十七歳の生涯を閉じた。

東光会創立者の熊岡美彦(明治二十二年-昭和十九年)は石岡市の生糸業の家に生まれ、東京美術学校西洋画科を卒業、大正八年第一回帝展に「朝鮮服を着たる女」で特選をとり、同十四年に鮮やかな緑の私服を着た婦人をモデルに「緑衣」を描き、第六回帝展に出品して初の帝國美術院賞を受けた。大久保作次郎、牧野虎雄、田辺至らと大正十三年に塊樹社を組織して帝展の新勢力となり、昭和七年には東光会を結成、自ら東京・戸塚に熊岡絵画道場を設立して後進を育成した。その門に学んだ者に昭和四十四年度日本芸術院賞を受賞した森田茂(明治四十年)がいる。森田は下館市出身、苦学して絵を勉強し、東光会に出品するようになるが、日本の伝説に根ざした土俗的

な美を追求し、「金蔵獅子」「獅子舞の人々」を日展、東光展に出  
品、近年は山形県鶴岡郊外で雪の二月に行なわれる農民の手になる  
「黒川能」を生涯のテーマとして取りあげており、この能を描写した  
作品が芸術院賞を受賞した。

二科会理事として二科会の中心となっている服部正一郎（明治四十  
年）は竜ヶ崎市生まれ、昭和四年より二科展に出品を続け、特待  
賞を受賞して十四年に会員に推挙、そして戦後理事となり、長年モ  
チーフとして来た「水郷」（第五十二回二科展）によって昭和四十  
四年度日本芸術院賞を受賞した。また水彩の小堀進（明治三十七年）は  
行方郡潮来町に生まれ、服部と同じく水郷地方に少年期までを過  
し絵を志して上京、水彩画の革新を目ざし、白日会、水彩画会会員  
となり、昭和十五年水彩連盟を創立、三十三年に日展評議員に推さ  
れ、現在は同理事をつとめている。不透明水彩による流麗大坦な表  
現に特色を發揮し、日展水彩の第一人者となっており、改組第一回  
日展出品の「初秋」で昭和四十五年日本芸術院賞を受けた。

彫塑では水戸市生まれの日本芸術院会員雨宮治郎（明治二十二年—昭和  
四十五年）がいた。男性の動的な姿態を主に表現し、それが発展し  
てスポーツをモチーフとするようになり、第十二回日展出品の「健  
人」で日本芸術院賞を受賞し、昭和三十九年に日本芸術院会員とな  
った。同じ水戸市生まれの木内克（明治二十五年）は官展を歩んだ雨宮  
に反し在野であるが、外形より内的な生命感に重きを置き充実した  
作品を發表している。県立水戸中学時代に彫刻科を志望して中退  
し、同郷の彫金家二代海野美盛に弟子入りしたという変わった経歴を  
持ち、のち朝倉文夫に入門、文展に出品したが飽き足らなかった。

を焼いたのは明治三十九年のことである。その後不慮の地震による  
失敗など辛酸をなめながらもどうにか作陶も軌道にのり、全国窯業  
品共進会や東京博覧会で出品作が好評を受けた。昭和二年に帝展に  
第四部工芸が設置されると審査員に推され、四年には工芸家として  
初めて帝國芸術院会員に、九年に帝室技芸員に任命された。戦時中  
に田端の工房が戦災で焼かれたが、郷里に疎開しいち早く筑波山ろ  
くに仮工房を設けて制作を休むことをしなかった。二十八年に文化  
勲章を受章、二十九年に大観と共に名譽県民に推された。波山の芸  
術は葆光彩彫刻にすぐれた個性を見せたが、葆光のほんのりと  
淡いペールの内部よりにじみ出る彩磁のやわらかい調子、美校時代  
の彫刻技術を生かし生の磁肌に彫刻する精緻を極める薄肉彫の端正  
さは深い味わいを持っている。このような至芸によって表現された  
格調の高さ、気品といったものは波山の作品以外には接しられない  
といってもいい過ぎではなからうと思う。文様の草花文一つとって  
もすでに学生時代から晩年に至るまで丹念に写生しており、その蓄  
積が制作に当って生かされた。彫刻文は一瞬たりともゆるがせにせ  
ず全神経を集中して一刀一刀に細心をこめ、しかも一つの作品が一  
か月、二か月とかかる。また文様の下絵の彩色も複雑を極め、最後  
の全体への袖掛けは手ロクロの上に器をのせ、それをまわしながら  
柄しゃくで一気に入らなくかける。すべての作業が真剣勝負である  
と自らを絶えず戒めていた姿勢からあの高潔な完成度の高い作品が  
生まれてきたといえよう。

伝統的な工芸として江戸時代より名声を保って来たのは「水戸  
彫」と称された水戸派金工の存在である。京都の後藤派の流れを汲

大正十年に渡仏、グラン・ショームニールに入りブールデルに師事  
し、「彫刻は粘土を削るもの」と認識し、ギリシャのアルカイック彫  
刻群に根源的な美を発見した。在仏十五年のち昭和十年に帰国  
し、二科会会友になったが辞退し、二十三年の第二回新橋会展に滞  
欧作を大量に發表して注目を集めた。生命感のあふれる力強く激し  
い作風は彫刻の本質に向って肉迫を感じさせる。テラコッタによ  
る「ひねり」の小彫刻も氏独特のものであり、近年はろう型、ロン  
ズ彫刻に独自の美を展開させている。昨年再び渡欧、「洗心」のの  
ち作風は一変し大作「エーゲ海に極ぐ」を生んだ。昭和二十六年に  
「臥像」で毎日美術賞、四十六年に「婦人誕生」で第一回中原悌次郎  
賞を受賞した。

工芸には大観と共に文化勲章に輝いた板谷波山（明治五年—昭和三十  
八年）が茨城県の重鎮として活躍した。波山は県西下館の商家に生ま  
れ、東京美術学校彫刻科を卒業、石川県立工業学校教諭となって金  
沢に赴任、九谷焼の産地をひかえ念願の焼きものを作れると心を躍  
らせた。はじめ木彫科の教諭だったが同科の廃止とともに陶磁科に  
転じ、九谷ををはじめ瀬戸、京都など多くの窯元を觀察し、主に釉薬  
の研究に没頭した。また美校でつちかった彫刻の技法を生かし、陶  
磁の表面に彫刻文を施す技術を勉強した。その後明治三十六年に陶  
芸家として独立するため金沢をあとにして帰京、東京・田端に工房  
を建てて制作を始めようとしたが、資金に困り生活との苦闘が続い  
たのであった。郷里の名山筑波山にちなんで「波山」と号したの  
もこのころで、工房から遠く望める筑波山を見てはわが心を励ま  
し、手作りでレンガを築いて窯をこしらえ、松マキを工面して初窯

む軍地功阿弥が宝暦年代に水戸で開業したのが初めてとされ、水戸  
藩九代藩主徳川齊昭の奨励により発展し、名工が数多く輩出した。  
玉川美久、篠崎勝国、玉川承寿、一柳友善、初代海野美盛らがそれ  
で、明治金工界に活躍する人物はこれらの門に学んだ。明治維新に  
続く明治九年に磨刀令が出るに及んで刀剣や甲冑の裝飾金具の制作  
に生きて来た金工師たちはほとんどが生活に窮するようになり、転  
職、廃業が目立ったが、芸術品や輸出品に活路を見出すようになって  
水戸彫は蘇生し伝統を保つことが出来た。初代海野美盛に学んだ  
海野勝珉（弘化元年—大正四年）、二代海野美盛（元治元年—大正十一年）、勝城  
の子海野清（明治十七年—昭和三十一年）がいるが、いずれも明治、大正期  
に彫金の至共を波露し、東京美術学校教授として重きを成した。勝  
珉は水戸に生まれ、明治二十三年の第三回内閣勲業博覧会に「蘭陵  
玉舞楽」を出品して妙技一等賞を受け、加納夏雄と共に彫金界の雄  
として名声を馳せ、美校教授、帝室技芸員をつとめた。海野清はそ  
の四男で美術学校教授、日本彫金会会長などにつき、重要無形文化  
財個人指定を受けた。二代海野美盛は彫金家海野盛寿を父として生  
まれ、美術学校彫金科を卒業、丸彫の人物、動物など体造型を得  
意とし、明治二十九年の日本美術協会春季展に出品した「銀製流鏑  
馬」は一等賞となるなど活躍した。美盛の長男建夫（明治三十八年）は  
父の業を継いで彫金家となり、東京学芸大教授をつとめ光風会会  
員、日展評議員となり、改組第一回日展に出品した「雨もよい」で  
昭和四十四年度日本芸術院賞を受賞している。このように水戸派金  
工の伝統は今日まで長く継承されて来ている。

### 三 文学

小説「土」を書いた農民文学の長塚節、「お才」などの民謡で知られる筑波根詩人の横瀬夜雨は共に筑波山ろくの常総平野より出た人物である。民謡と童謡に親しみ深い詩を残した野口雨情は東北磯原海岸近くの旧家に、「己が罪」など新聞小説に名を成した菊池幽芳は旧水戸藩士の家に、それぞれ生まれた。現代詩の先駆をなす詩人山村暮鳥は群馬に生まれたが後半生を茨城県で過ごし、大洗で没した。



長塚節の姿旅

長塚節は和歌革新の自論を推進してくれる人物とみていたとのことであり、節もまた子規に信頼を寄せ、鉄船迷へり、子規ハサメタリ……歌ヲヨマントスルモノハ万葉ヲ

ヨメ」と主張するほどであった。その子規は三十五年に死去し、節の落胆は大きかった。節は四十一年、三十一歳の時に初めての小説である「芋堀」を書いた。すでに夏目漱石が「吾輩は猫である」「同門の左千夫が「野菊の墓」を発表しており、節にとってはこのような周囲の情勢に刺激されるところが大きかったとみられる。四十三年には自伝的な要素を含んだ「隣室の客」、農民の生感を写した「太十と其犬」を『ホトギス』に発表した。この年に漱石より「朝日新聞」に連載の機会を与えられ、小説「土」を執筆することになった。漱石は連載を始めるに当たって、「氏はまだ若い人である。しかも若い人に似合はず落ち付き払って、行くべき路を行って、少しも嗜好を追はない。……余は床しく思った」と紹介文を書いている。

「土」は「烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけては又ごうつと打ちつけて皆瘦けた落葉木の林を一日苛め通した」という書き出しではじまる農村生活を主題にした写真小説である。節と同じ部落の小作農勤次一家をモデルに明治期の封建的な農村社会を鋭く描写しているが、漱石をして「寧ろ苦しい読みものである」といわせたほどでやや難解である。しかしそこには農村のリアルな実体があるのであり、地主であった節が書いたことにも意義を感じる。節はこの「土」を執筆するに当って家の中は奉公人や使用人がいてうるさいと、ニキロほど離れた小学校に通い、その教室を借りて筆を走らせた。まる一日筆をとりようやく一回分まとまるとその夕方に投函したという。

ちょうどこの頃は、父が政治に手を出したりしたために家産が傾き、かつての大地主だった家も大分生活に困っていたのであり、生

計を立て直すために節自ら竹林栽培、炭焼きをするなど苦労した時期であり、このようなことがたつたのか四十四年に喉頭結核にかかり東京・根岸の養生園に入院してしまうのである。翌年退院、「土」が東京・春陽堂より発刊され、大正三年「鍼の如く」を「アララギ」に連載、四年に漱石の紹介で入院した九大付属病院の一室で死去した。三十七歳の若きであった。

横瀬夜雨(明治十一年—昭和九年)は筑波山を仰ぐ常総平野の一角、横根(下妻市)に生まれ、本名は虎寿といったが、生来虚弱で三歳の時にポット氏病にかかってせむしとなり、その後再発して両足も委縮してしまうという不具同然の身であった。生きる望みを失ない、「世を呪ひ、死を思ふこと切なりしが、母に慰められて生く」と業を背負って生涯を送ることになったが、十八歳の時に「少年文庫」に「めをと」という詩を投稿したのが詩人としての出発であり、「少年文庫」改題の「文庫」に自らの悲しい生い立ちをつづった「神も仏も」を発表して一躍認められることになった。不幸なわが身の告白、血をしぼるような絶叫、文庫記者の河井醉若らから「詩に凄色あり、哀音ある」と高い評価を受けたのである。三十年に「夜雨」を号したが、夜中にしどと降る雨の如しという号はいかにも夜雨自身の境遇をもの語っているか



横瀬夜雨(肖像自筆)

のようなものである。三十一

年に民謡詩の代表作「お才」を発表、「女男居てさへ筑波の山に霧がかかれば寂しいもの」と続くこの詩は今日でも最も愛唱されているものの一つだ。三十二年に処女詩集「夕月」を刊行し、その後「花守」「二十八宿」を世に送り、「明治初年の世相」「天狗騒動」など貴重な著書を残した。

野口雨情(明治十五年—昭和二十年)は夜雨と異なり旅から旅へと生涯を放浪の旅に送った詩人であるといえる。東北磯原の名門の家に生まれたが、代議士の伯父を頼って上京、東京専門学校に入学した。しかし詩作に憧れ、中退して北海道へ渡ったのが旅のはじまりであった。いったん郷里へ帰り平凡な結婚をしたが居たたまれず、「われ故山を去る」の書き置きを残して再び北海道へ、石川啄木や岩野泡鳴らと交わったりした。その後また磯原に戻り、漁業組合長などをつとめ地方の名士になったがそれも東の間のことでまたまた旅浪の旅に出、一時水戸に生活したころ生活苦と焦燥感にかられた自分の境遇を詩につづった。それが「俺は河原の枯すすき……」の「船頭小唄」であった。中山晋平が作曲し関東大震災後に爆発的にヒットしたという。上京してからは金の星社に入り、童謡集「十五夜お月さん」「極楽人形」「青い眼の人形」「螢の灯台」「朝おき雀」を次々と刊行、民謡集も「別後」「のきはばすどめ」「おさんだいしょさま」などを世に送った。童謡の名作として今日も広く愛唱されているものに「七つの子」「あの町この町」「兎のグンス」「青い眼の人形」など数多くある。「童心芸術の生命は、土にかえる」こと、それが童心芸術であります」と自ら書いているが、雨情は純真な童心を愛すると同時に童心を持つ子供たちに愛されたいと願ったのであ

らう。雨情は宇都宮郊外で六十三歳で亡くなったが、あとには清らかな童謡が残され、今日に伝えられた。

詩人の山村暮鳥(明治十七年―大正十五年)は群馬県群馬町に生まれたが、明治四十一年に聖三一神学校を卒業し伝導師として秋田県に赴任、四十四年に水戸聖公会ステパノ教会に転じてから茨城県とのつながりが生まれた。二十八歳の時でそれから大洗町磯浜で四十一歳の生涯を終るまでの十数年は、千葉、福島県へも転居したりするが、やはり水戸周辺が生活の中心であったといえる。大正二年に処女詩集「三人の処女」を新声社より発刊、同四年に暮鳥詩の傑作であり現代詩の先駆となった「聖三稜玻璃」を発刊したが、これは世間には受け入れられることがなく、自分の芸術に対する悪評はその秋において極度に達した(半面自伝)とあり、まったく絶望に打ちひしがれた。健康も極度に害して肺結核が悪化し、教会をやめて千葉県北条海岸に転居、その後大洗の大貫、福島の前を経て最晩年は大洗町磯浜に療養のための住居を構えた。「風は草木にささやいた」「梢の巢にて」に続く第五詩集「雲」は生前に間に合わず、葬儀のさいに供えられた。「雲も



山村暮鳥

また自分のやうだ……」という「雲」からとった詩を刻み、大正十五年に大洗海岸に詩碑(小川芋錢書)が建てられた。暮鳥をかけ橋にしていま大洗町と群馬町とが姉妹都

市として手を結び合う語が両町間にすめられ、話題を投げている。

新派悲劇として人気を集めた「己が罪」の作者は水戸の貧乏士族の家に生まれた菊池幽芳(明治三年―昭和二年)である。幽芳は本名清、水戸中学卒業後一時県南の取手町で小学校の代用教員をつとめたが、水戸出身で大阪毎日新聞の取締役だった渡辺治に見出だされ、同社に入社した。渡辺は同社社長に就任するが、当時の新聞小説に対して「小説を掲げることが決して小新聞の理由にならない」との卓見を持ち、社の内外に小説を奨励すると同時に自らも執筆するという進歩的な考え方を持っていた。その渡辺より示唆を受けて幽芳は社員でありながら小説を書き始め、まず翻案小説の「光子の秘密」を同紙に連載、続いて明治三十二年に連載したのが「己が罪」で家庭の主婦に多く読まれ、圧倒的な好評を博したという。のちに芝居に単行本になり、まったく有名になった。大正十三年に同社取締役となり、昭和三年辞任して社友となったが、新聞社子飼いの小説家として一生を新聞社内でも過ごした珍しい存在でもあった。

現在活躍している小説家に牛久町の小川芋錢旧居近くに住む住井すゑ(明治三十五年)がいる。奈良県の生まれであるが牛久町出身の作家尤田卯と結婚して同地に住むことになった。茨城県下の働く少年を主題にした「夜明け朝明け」で毎日出版文化賞を受賞、目下部落差別をテーマにした「橋のない川」を執筆中ですでに第六部まで発刊恐らくこの作品が彼女のライフワークとなるであろうが、人間等しく平等であるはずなのにこの狭い日本国土において依然として差別が生き続けている現実に激しい恐りをこめて描いている。この差別がなくならない限り彼女は書き続けるであろう。(茨城新聞社文化部長)

人物を中心とした

# 文化郷土史

— 栃 木 県 —

吉 羽 和 郎



小さな日本列島が欧化の嵐に吹きまくられた明治維新以後、東京から僅か一〇〇キロという至近な距離に位置しながら不思議な程に自らの色を固執保存してきた栃木県、朴訥ぼくどくなそして一見粗野にさえ見える下野の国の印象を具現しているものに本県の益子焼がある。肉厚な手づくり、生の土の香をそのままただよわず釉ゆうの味わい。地味な絵付けと外からの風に染まらず、古い手仕事のよさを今に残したあたりに栃木県文化の本質的なものが存在するように思う。

こんな意味から益子焼とその周辺の人びとから話に入ろう。

地場産業として益子焼が生産され始めるのは嘉永六年（一八五三）頃でそれから幾多の社会的、経済的変せんを経て今日に至るのであるが民芸窯場として益子焼の名を世界的になさしめたのは浜田庄司である。

浜田庄司は明治二十七年（一八九四）に東京に生まれ大正五年（一九一六）東京高等工業窯業科を卒業、本県には大正十三年（一九二四）に来県し益子町で制作がはじめられる。

高等工業在学中に河井寛次郎を識り大正八年（一九一九）頃から英人バーナード・リーチ、柳宗悦を識って、この人びとと共にいわゆる民芸運動が展開される。

戦後の二十七年（一九五二）芸術選奨文部大臣賞を受賞、昭和三

\* \* \*



浜田庄司

十年には人間国宝として第一回重要無形文化財保護者の指定を受けた。昭和三十七年(一九六二)柳宗悦死去のあとを継いで日本民芸館館長となっている。

現在もその旺盛な制作力は常に世人を驚かせ世界的巨匠として本県文化の象徴的存在をなしている。

浜田庄司とその周辺の人々を語る場合、誰もが一番先に

口ばしる人に佐久間茶太郎がいる。彼は生粋の下野人であり益子の陶土そのものである。明治三十三年(一九〇〇)益子の窯元に生まれ父は益子焼の名人陶工であった。彼は生まれたときから陶工であったわけである。地元の陶器伝習所に学び父の窯で陶業に励む間、大正十三年(一九二四)浜田庄司に師事した。同時に柳宗悦、バーナード・リーチとも親交を結び民芸の本質を堅持しながら一方、国画会に籍をおいて作家としての地位を築いた。益子焼の伝統を頑固なまでに守りその作風は国内は勿論、海外にも聞こえている。昭和三十四年(一九五九)栃木県文化功労章を受けている。

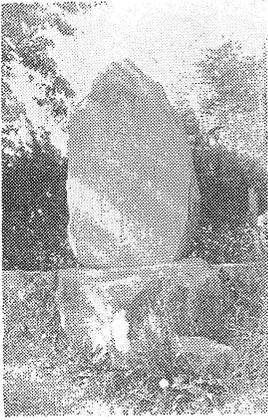
浜田門下ではほかに島岡達三がいる。大正八年(一九一九)生まれ東京高等工業窯業科に学んだ彼は縄文土器の古代手法を現代に生かす独特の象徴文様で世に知られている。

とお詠みになった。  
ともあれ民芸がすなおに残る本県の体質はそれ自体郷土文化史の一つの柱といえよう。

\*

さて話しを進めて絵画の世界をのぞいてみる。  
江戸末期から明治維新後、自然科学の精神が蘭学を基調として抬頭し、その影響は当然美術界にも反映して対象の遠近や量塊感、構図などを幾何学的計算に基づき、いわゆる近代ヨーロッパの作風思想が流入するわけであるがこの近代洋画の先駆者の一人に重文指定の「鮭」や「花魁」の作者高橋由一がいる。

由一は下野国佐野藩士高橋源十郎の嫡男として生まれ幼年時より絵ごころがあり十一歳ごろ主家に入っていた狩野派の画家に師事して運筆法を学んだ。二十歳を過ぎた頃から西洋画学習の念を起し、後年川上冬崖の指導を受け更に横浜に住んでいたワグマンを訪ね入門したことが由一の西洋画業を本格的にならしめたようであ



皆川マス女をお詠みになられた天皇御歌の碑  
(益子指導所構内)

る。由一四十五歳の明治六年(一八七一)に(三)に絵場天教場を

本県陶芸界のホープに佐野市に生まれ生地で築窯、現在作家生活の傍ら東京芸大で教頭とる田村耕一があり、日本伝統工芸会の鑑査員として活躍、渋い地肌とたくみな筆さばきで明るく詩情溢るる作品は識者の間にその評は高い。なお、県北の郷土佐久山に築窯して辰砂釉の追求に専念する福原達朗(明治三十八年生まれ)は光風会審査員、県文化功労章受章者である。

生粋の益子人、木村一郎(大正四年生まれ)は辰砂、練上げの手法を用いて多くの作品を発表、現代日本工芸展をはじめ全国陶磁器展に活躍受賞するほかマルセーニ美術館主催国際陶芸展に招待出品している。

異色、加守田章二は昭和八年(一九三三)生まれと若い陶芸家ながら本県陶芸界の将来に囑望される一人である。

然しながら陶芸の中から本県文化の真の一面をのぞこうとするならば無名の工人、皆川マス女を知ることであろう。

マス女は明治十年(一八七七)生まれ、十歳のときから昭和三十五年(一九六〇)八十七歳でこの世を去るまで、ただ黙々として益子土瓶の絵付に専念して生きぬいた。

その間国内展覧会は勿論、戦前ベルリンで開かれた世界手工芸品展覧会で最高賞を獲得しながら益子焼のただ一人としてその生涯をつつましやかに終えた。

昭和二十二年(一九四七)天皇陛下のご前で陶画の実演をされ、陛下は老婆の素朴なたらちふるまいとその妙技にいたくご感銘され、さえもなき嬸のえがくすえもの

人のめつるもおもしろきかな

創設、弟子七十名ほどを集めた。明治十七年(一八八四)に廃校するまで創立以来の習学者は二五〇余名にのぼり原田真次郎、五百城文哉、川端玉章、荒木寛敏など明治初期の優れた画家達がこれに含まれている。

彼が六十五歳の明治二十六年(一八九三)多年美術の開発に尽力した賞として銀盃一個を下賜される名誉を得た。翌明治二十七年(一九〇四)六十六歳で逝去しているが由一の残した業績の数々はわが国美術史の一頁に大きく輝いている。

由一とほぼ時代を同じくして反骨の文人画家、田崎草雲(一八一五〜一八九八)がいる。

田崎氏はもと羽山氏で代々栃木県南地区の寒村、真名子村に農を営んでいたが草雲の父恒蔵の時、江戸に出て足利藩主戸田氏に仕え小川町にあった藩邸に住み、二人扶持を受けて田崎氏と称した。草雲は文化十二年(一八一五)ここで生まれた。父は南画をよくして生計の一助としていたので草雲の画才はこの環境に芽生えたものであろう。

草雲は若年の頃儒者を志したが二十三歳のとき谷文晁の門に入って南画家に転向した。天保三年(一八三二)三十七歳の時大和の月ヶ瀬に遊びその真景を写した「月ヶ瀬探梅図巻」二巻は彼の代表作として広く世人の知るところである。草雲三十九歳その画技ようやく世に謳われるに至って足利藩士戸田忠文により藩の画師として招かれ士に登用された。世は明治と移り廃藩の後彼は足利学校の再興を企て自ら経書を講じた。

明治十一年(一八七八)足利市の西方蓮岳山の一角に白石山房を

管み画業に精進するが時に草雲六十四歳、老いて益々熾んな彼は六十八歳の時に第一回内閣共進会に「春山曉鷲」「秋山晚暉」二図を出品して「得宜」の銀印を受賞し、七十歳には第二回内閣共進会に「十指春風一棹援山」を出陳して「蒼古」の銀印を受賞し七十三歳には皇居の御杉戸四図八枚に揮毫という榮譽を担い明治二十三年（一八九〇）七十六歳の折、帝室技芸員に選任せられてい

る。明治三十一年（一八九八）草雲はこの白石山房において病床に伏し八十四歳の寿を終えたのであるがその門弟には小室翠雲が

「下野の画仙」とうたわれる小杉末醒（一八八一〜一九六九）は

はじめ洋画をよくし後年独特の日本画に転じて放庵と号した。本景日光山内に生まれ少年の頃当時に隠棲していた洋画家五百城文哉に師事西洋名画の複製版を模写したりあるいは風景の写生を試みるなどして自由気ままな作風を見てもらっていた。十八歳で東京し、小山正太郎の不同舎に入りその後明治三十五年には太平洋画会の創立に参加した。明治四十一年（一九〇八）から文展にも出品し明治四十三年（一九一〇）に出品した「杣」が三等賞を受賞、翌年第五回の文展で風景画「水郷」が最高賞を得ている。その二年後に渡欧するがここで東洋画への認識を新たにして東洋人という自覚を強めて帰国、そしてただちに横山大観と共に日本美術院を再興し、もともと日本画の団体であったこの美術院に洋画部を新設した。再興院展では未醒の作品は日本画に隣り合って陳列されたが少しも会場の雰囲気を感じずものではなかったと言う。装飾的、平面的でど

として教鞭をとるかたわら「武士」「桜町中納言図」「常世図」「維盛哀別図」等今日も残る名品を続々と発表した。明治三十一年（一八九八）には日本美術院正員として加わり、同四十年（一九〇七）文展が開設されて以来その審査員として活躍、明治四十一年（一九〇八）再び東京美術学校に教授として復帰大正六年（一九一七）帝室技芸員に任命された。晩年には、主に法交会に作品を発表昭和六年六十七歳でこの世を去った。彼は有職故実を研究するとともに、大和絵独自の賦彩、筆致等を生かした新しい歴史画を開拓、また自ら甲冑を制作したという。その門下から嗣子の安雄をはじめ安田靉彦、磯田長秋、羽石光志らが出ている。

一方仏画でその名を今も知られる荒井寛方（一八七八〜一九四五）も本県の生んだ誇りの画家である。

寛方は明治十一年（一八七八）本県氏家町に生まれ二十二歳の時上京して水野年方の門に入り歴史画を研究した。明治四十年（一九〇七）二十九歳の時第一回文展に入選、第二回同展には「出陣」を出品して三等賞となった。大正三年（一九一四）の第一回院展、翌



荒井寛方

年の第二回院展と続けて出品し、日本美術院同人となった。大正五年（一九一六）インド愛國の志士タゴール翁に招かれて渡印、当地の美術学校で教鞭をとるとともにアツヤンタ洞窟などの壁画を

ことなくロマンの香りを持った作品が院の芸術的傾向にかなり近接していたのであろうがこの辺に未醒の画仙味を察することができ

る。その後彼は放庵を改めて日本画の世界に入ってゆくがそれも自然の成り行きであったようである。放庵紙と呼ばれる独自の麻紙に墨をにじませた彼の画境ともいふべき世界を現出するに至るのである。その著「放庵画論」の中で次のように語っているが、ここに彼の水墨画に対するこよなき愛着を読みとることができて興味深い。「水と墨の、紙乃至絹の上に集散離合する魔術のような美しさは視覚より深く、殆ど触覚的の撫愛を惹く、美人を品して皮膚の粗密に及ばざるは、未だ真に美人を知れりとは云はれぬ、油絵に於ても名手は手触りまでも好もしく感ぜられ、凡作は然らず他のいづれの造形美術にも亦此の差を認めるけれども殊に東洋画の水墨に濃やかな、ほのかな触覚的魅力を見る」と。

放庵の常に新しく独創的な仕事に対し日本古来の大和絵の技法を固執した人に小堀綱音（一八六四〜一九三一）がいる。

綱音は現在の佐野市に生まれ幼時より和漢学を修めるとともに画家として知られた父の晏齋について画を学ぶ。明治十七年（一八八四）上京して川崎千虎の門に入る。同二十三年（一八九〇）第三回四国勸業博覧会に「大阪役後」を出品、妙技三等賞を受けた。翌二十四年には東京美術学校長岡倉天心を会頭とする日本青年絵画協会に寺崎広業、山田敬中、梶田半古らとともに参加、明治二十九年（一八九六）日本絵画協会第一回展に「経正詣竹生鳥」を出品、銅牌二席を受けた。この年十一月東京美術学校講師、翌年には助教授

模写した。大正七年（一九一八）に帰国後は専ら仏教的主題にインド壁画風のユニークなフォルムを取り入れた作品を制作、院展への出品を続けた。また大正十五年（一九二六）には渡欧もしている。昭和十四年（一九三九）文部省より法隆寺壁画の模写を依頼され翌年からそれに専念した。しかし、その完成を見ずして昭和二十年（一九四五）氏家に帰省再び法隆寺に向う途中旅路にて急逝したのである。

本県画家中の異色清水登之（一八八七〜一九四五）は現栃木市の生まれ、二十歳の折絵画修業をめざした岸身渡米、ここで二十世紀の画家として立体派の洗礼を受ける。帰国後は二科に所属し、樗牛賞、二科賞を受賞するが昭和五年（一九三〇）に独立美術会が発会するやこの創立会員として迎えられ以後ずっとここで活躍することとなるが、おりしも軍の抬頭とともに彼本来の仕事の場は縮小され、昭和二十年おしくも五十八歳の生涯を終わる。

日本芸術院会員であった川島理一郎（一八八六〜一九七二）は足利市の出身、日展理事をつとめたわが国西画壇の重鎮である。

県下の旧制中学校の教師のかたわら異国情緒や文明開化を独得な詩的抒情で表現し「澄生版画」とも言うべき一つの世界を生んだ川上澄生（一八九五〜一九四九）の作風は民芸の心に通ずる雰囲気をもつて本県の体臭がただよ。

現役では洋画で日展岡田賞受賞の宇都宮大学教授の矢口洋、日本画で日展二年連続特選の米陀寛がおり院展同人島多納郎、羽石光志らと中央画壇で活躍するものが多い。

\*

彫刻では日展審査員をした南庄作が西那須野で農民作家として特

異な作家活動をして異色をはなち、足利市出身の飯田善國はステレンスを素材とした前衛作家として殊にドイツを中心として海外に活躍現在は帰国して千葉県勝浦や本県美術館前にキネティック・モニュメントを制作して話題を呼びさらに詩人西脇順三郎と共同制作の「クロマトポイエマ」は美術界に新しい問題をなげかけている。

\*

書道では新界の名を一身に背負うように巨星豊道春海（一八七八～一九七〇）が大田原市の出身である。  
春海は本名寅吉、坊号慶中、大田原市佐久山の石川家に生まれ二十三歳出家受戒得度、豊道家を継ぐ。西川春洞に師事して大正博覧会に最高賞を受賞して書道界に名をなし瑞雲書道会、日本書道作振会、東書道院、日本書道院などつぎつぎと創設して書道の振興に努め昭和二十二年芸術院会員となった。昭和二十三年書道の日展参加を実現している。その後日展の顧問として書道の重鎮をなしていたが昭和四十五年九十二歳で逝去している。

\*

以上華やかな造形美術部門に対し文学はどうであらうか。  
現代文学風土記（奥野健男）によれば「下野の國は上野と同じケヌの國として昔から文化が栄え、また足利氏の本拠として、明の古典をあつめた足利学校などもあり、天台宗の古刹日光の輪王寺が家康をまつる東照宮となつてますます栄えたのであるが、幕府の直轄を三百年にわたつて受け観光地ずれしたため、反骨精神は稀薄になつたようだ。そのため明治以後は、県民性もこれといった特徴のない印象の薄い県で文学者は極めて少ない」とある。

を

ほんとうに生かさなかつたら

人間、うまれてきたかいが

ないじゃないか。

路傍の石

この碑文こそ有三の倫理観でありその素顔であると言えよう。

なお父が官吏として本県赴任の關係から栃木高女を卒業した吉屋信子や戦争中の疎開で本県に住んだ江口漁がいる。

\*

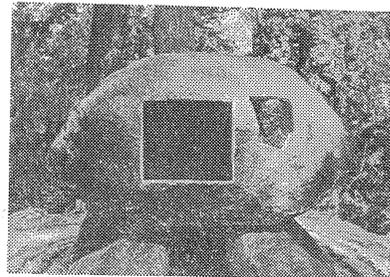
詩歌では現藤岡町出身の逸見猶吉（一九〇七～一九四五）がいる。猶吉は暁星中学から早大を経て昭和十年（一九三五）草野心平とともに「歷程」を創刊活躍した。同じく「歷程」の岡崎清一郎は足利市の生まれで北原白秋に師事して「内体耀輝」で文芸汎論賞を「新世界交響楽」で高村光太郎賞を「春鶯囀」で読売文学賞を受賞するなど華やかな活躍をつづけている。

川柳の前田雀郎（一八九七～一九六〇）は宇都宮の出身、若いうちから川柳に興味を抱き大日本雄弁講談社や都新聞に就職したが昭和十九年（一九四四）郷里に帰り県柳壇の指導的役割を演じた。主宰した川柳雑誌「ふたあら」は県内外の柳壇に及ぼした影響が少なくない。主な著作に論集「川柳と俳諧」句集「描花洞目録」がある。県文化功労章受章者である。

戦争中の疎開地として野口雨情が宇都宮に居住、現在その住居跡に雨情の碑が立てられている。

そうした中でも栃木市出身の山本有三の存在は県民の誇りうる一人である。

有三は明治二十年（一八八七）栃木市の旧宇都宮藩士で呉服商の家に生まれ、栃木の高等小学校を卒業後浅草の呉服商に奉公に出されたが感ずるところにあつてか帰省、後、努力して一高から東大独文科を卒業した。昭和三年（一九二八）芥川竜之介、菊地寛、久米正雄らと新思潮を創刊する。戯曲「津村教授」「嬰兒殺し」「生命の冠」は帝劇などで上演されて評判になった。やがて新聞小説に手を染め「生きとし生けるもの」「波」「風」「女の一生」「真実一路」「路傍の石」などを書き、知識人の家庭を中心とする広い読者層を掴んだ。そのヒューマニズムと立志伝と、適度な社会的正義心、健全な倫理観などが一般社会にマッチして今日も多く読者を



山本有三文学碑

（栃木大平山上）

得ている。創作のほか国語問題、著作権問題にも強い関心をもち国語審議会の委員に名をつらね、また参議院議員を一期つとめたこともある。  
彼の郷里の山太平山県立公園地内に山本有三文学碑が建てられている。たったひとりの一生分を

\*

作家以外の文化活動家では美術評論家の久保貞次郎・和時計の研究家として日本的に著名な塚田泰三郎が健在である。

久保貞次郎は明治四十二年（一九〇九）生まれ現在県東部の真岡市に居住、中央では第一線の美術評論家として活躍中であり実践的な美術作家の育成者としてその業績は高く評されている。

即ち、北川民次、瑛九、鶯囀、オノザト、トシノブ池田満寿夫等國際的に活躍した多くの作者がそれである。無名の作家のもつ創造的な芽を発見、発掘する彼の眼は抜群である。サンパウロ、ビエンナーレ展など國際的美術展の日本代表コミッションナーをつとめるなど活動範囲は広い。

一方美術収集家であつてピカソをはじめ、ヨーロッパ近代絵画の久保コレクションは著名であり、また版画の収集においても、レンブラントのエッチングをはじめ多数の秀作を蔵している。

殊に業績の中で大きなものは日本の児童画に対する理念の改変確立であつて、今日、児童の描く「創造画」もしくは「自由画」はもはや常識となつたが戦前の学校殊に小学校における図画教育は、臨画、写真を中心とした描写主義で、それが児童の創造性を抑圧している状態に彼は敢然挑戦し、いわゆる「創造美育」運動を提唱した。今日の児童美術教育のいわばパイオニアであり、その理論的根拠は殆ど久保理論といつて過言ではない。

和時計の塚田泰三郎は明治三十年（一八九七）真岡市の生まれ。栃木師範学校を卒業し小学校訓導となり昭和二十八年（一九五三）退職のときまで本県教育界にあつたが、この間和時計の研究に没頭

し、昭和二十五年（一九四五）単行本「和時計」を出版して日本エッセイストクラブからエッセイスト賞を受賞している。さらに民芸、民家その他の民俗研究にたずさわり現在県文化財調査委員である。川上澄生の版画研究家としては第一人者であり澄生の仕事に対する助言者でもあった。澄生の出版した私家本のほとんどは計画から編集、製本まで塚田の手になったものである。また浜田庄司のよき相談役としてその役割は大きい。

現在、県の依頼をうけて栃木県立美術館の館長をつとめている。

芸能関係には齋藤コウがいる。

実業家として著名な住友セメント社長故齋藤次郎氏の母堂で明治十四年（一八八一）生まれ、日本の古典芸能の一つである一中節宇治流の演奏者として知られる。昭和十六年（一九四一）一中節の宇治流家之門人として宇治文雅を名乗り、その後日本の数少ないこの芸能の担い手として活躍し、国の無形文化財技能保持者となった。現在は県南の野木町に隠棲している。

古典のこれと対象的にバレエの橋秋子は宇都宮宮の出身、栃木師範を卒業ののもソビエトの舞踏家アンナ・パヴロヴァに師事し後に橋バレエ団を組織し昭和四十二年（一九六七）に芸術祭に受賞した。後進指導の目的から橋バレエ学校を創設して自ら校長となった。娘牧亜佐美は現在わが国バレエ界の指導者として活躍している。

\*

芸術の外に目を転ずるとまず本県文化財保護運動の先達、考古学者丸山瓦全（一八七四～一九五一）がいる。

丸山氏は足利市の油商の家に生まれたが若くして考古学に興味をもちこれに没頭すること四十年。古くから文部省史蹟名勝天然記念物保存協会員をつとめ県内の文化財をくまなく調査しその保存に精魂を傾けた。

中でも佐野市竜江院に埋もれていたオランダの大学者エラスムスの像の発見調査は著名である。この像は一五六〇年日本に漂着したオランダ船リーフデ号に載せられていた木像であって現在国の重要文化財として東京博物館に管理されている。

彼によって県下で発見、あるいは調査保存にかかわる古墳はその数なんと四千二百九十基に及ぶと言う。殊に第二次大戦中軍の供出命令にあった県下の梵鐘の中文化財の重要な意義を熟弁して三十七箇を破壊から守った逸話は有名である。丸山氏は単なる机上の考証学者と異なりその行動は実践主義、実証主義であった。常に現地に赴いて調査研究に当たった。ために、県内に彼の足を留めない町村は一つもないと言う。

同じ足利出身に民俗学の中山太郎（一八七六～一九四七）がいる彼は歴史的な文献を多用し民俗史の立場の樹立に功績があった。

早稲田大学卒業後、民俗学の研究活動に従い、処女作「日本民俗誌」をはじめとして、「日本盲人史」「日本巫女史」「万葉集の民俗学的研究」など数多くの著作がある。

柳田国男がかつて「上野図書館の本をみな読もうとした男」と評したほどの人物で、広範圏にわたる読書とそのたびに作った約三万件にのぼるカードが彼の学問の基礎となり、独自の民俗史をうちたてている。

日本交通史の研究に一生を捧げた篤学者大島延次郎（一八九四～一九七三）はその資料収集のための探訪地域が本州全域に及んだと言う。この時収集した古文書は彼の邸内の石造り倉庫に充満しており、交通史研究の貴重な資料となっている。

彼の著作中「日本交通史概論」「日本近世交通史」「日本の路」「關所」は著名である。一方県の郷土研究に裨益した所も大きく下野史学会の会長として「下野文化史」「栃木の歴史」など郷土史関係の著作も多い。

現在日光市湯本温泉に住む杉田六一はオリエンツの研究者として著名である。

青山学院にて英文学に専攻し、卒業後、母校で二年教鞭をとり後国際観光事業の研究に精力をそそぎ、ホテル経営のかたわらオリエンツ研究に没頭した。

「ユダヤ王ヘロデ」「ユダヤ史研究余談」などの著作があり幅広い文化人として県内学界の指導者の地位にある。

\* \* \*

以上が明治以降から現在に至る栃木県の文化人脈であるが、文化の中心である東京と僅かな距離に位置する本県の場合文化活動の場も又文化のローカル色も中央に融合され、特に近年交通の発展から東京と画一化されて特色ある独自の地方文化の形成はますますうすらへてであろう。

（栃木県教育委員会文化課長）

人物を中心とした

## 文化郷土史

—群馬県—

森田秀策



## 一 群馬の風土

南北に長い我が国のほぼ中央に位置する群馬県は、古くは毛野、上毛野、上野（上州）などといわれ、東国の中心地として、ことに古墳文化を中心とした古代における動きには注目すべきものがある。しかし戦国時代は上杉・武田勢の戦乱の場と化して地上の建造物などは殆んど消え失せてしまった。江戸時代は関八州の一つとして江戸を守る交通の要衝地として中仙道、三国街道、例幣使街道、信州街道などが通じて街道文化が栄えたが、領治は網の目のごとく幕府直轄の天領、藩領、旗本領と細分化され、統一的な動きがとれないで来た。幕末から盛んになった養蚕・生糸業は明治期以降群馬の代表的な産業となり、経済、社会、文化の発展と大きなかわりあいを持つようになってきた。

群馬県の風土は厚い堆積の火山灰土壌の上の夏の暑さと冬の寒さに代表される。よく「雷と空の風義理人情」といわれるように、三国山脈や上毛三山（赤城、榛名、妙義山）、関東山地の麓に発生する入道雲はたちまちにして雷鳴をとどろかす夕立となり、むしあつさを一気にふきとばす。激しい雷を怖れた昔の人たちは利根川沿岸を中心にした県内各地に雷神をまつる神社（雷電神社）を数多く建てている。雷の発生で有名な稲倉山に近い富岡市一の宮の貫前神社の本殿（重要文化財）には雷神を画いた窓がついている。一方、三国山脈の裏日本側に大雪を降らした北西の季節風は冬の上州に空っ風として吹きあれる。こうした風を防ぐため平坦地の農家の敷地にかしぐねをめぐるしている風景をみる事ができる。冬の間閉ざされ

た雪国の越後から出稼ぎの杜士がやってきて、そのまま永住し譲造業や米穀商を営み経済界に活躍している人も多い。日照時間は高知、宮崎県などと共に全国上位であり、からっとした天気は県民性にも影響を与えているものとみられる。

かつて内村鑑三が住谷天来に送った「上州人」と題した漢詩には「上州無智亦無才／剛毅木訥易被欺／唯以正直接萬人／至誠依神期勝利」とあった。県民性という時に、よく「からっとしていて明かるとい」という長所と、「新しいもの好き、飽きっぽい、ことばが荒い」という短所が指摘されている。こうした風土と県民性も、文化の発展という視点からみる時、全く無縁なものともいえぬ点があるのではないかとみられる。

## 二 宗教家の活躍

明治七年十一月、中仙道筋の安中の竜昌寺で多くの聴衆を集めて維新後我が国では初のキリスト教の説教が行われた。この主人公こそ数日前にアメリカから帰国し、父母が待っている安中の新屋敷へ



新島 襄

かかった若き日の新島襄（天保一四～明治二三）である。彼は元治元年、鎖国の日本を脱出して渡米し、熱烈なキリスト教徒となり、教会と学校を建てたために帰国したのである。安中では新島の説教を受けた者の

中から湯浅治郎など三十人位の信者が生まれ明治十七年には安中教会がつくられた。京都へ赴いた新島は同志社を創立、第一回の卒業生の中から海老名弾正を安中教会の牧師として赴任させている。海老名は安中から県都の前橋へと移ったが、以後にもたびたび説教に來ている。海老名の勧めに従って小学校長の職をなげうって同志社に入學し、後に安中教会の牧師になったのが柏木義円（万延元～昭和一三）である。県下における組合教会の中心的立場にあったことから「上毛教会月報」を発行し、誌上で自己の所信を説き、人類愛の視点から日露戦争も批判し、当局に検挙されたこともあったが説は曲げなかった。新島精神を継ぐため、戦後安中に創られた新島学園の初代園長柏木隼雄は義円の子息であり、やはり同志社を出たあとオペリン大とエル大で神学を修めた教徒である。同志社に学んだ者には高崎の生まれで日銀総裁になった深井英五（明治四～昭和二〇）、牧師志望から国家社会主義者となった高島素之（明治一九～昭和三）などもいた。無教会主義者として有名な内村鑑三（文久元～昭和五）は高崎藩士内村宜之の長男で、幼少時代を高崎の城下町で過ごした。萬朝報記者として足尾鉾毒事件を報じたことや、一高時代不敬事件を起こしたことは有名だが、いま高崎の頼政神社境内に、前述の「上州人」の漢詩碑が建てられている。内村と親しかった住谷天来（明治二～昭和一九）は群馬町東国分の生まれで、村にあった青年運動や公娼廃止運動に従ったり、伊勢崎や富岡教会の牧師だったが「聖化」を主宰して、非戦論平和論を展開した。安中教会の設立に力があったのは湯浅治郎（嘉永三～昭和二）で、郡書記、県会議員、国会議員と歴任し、同志社の財政面で面倒をみたり、妻

はつが徳富蘇峰の姉であつた關係から民友社の設立にも力を貸して「國民之友」「國民新聞」の援助をしている。県会議員時代、原市の真下十郎や宮口二郎らと共に全国初の廢娼運動の先頭に立ち、遂に明治二十四年には県知事に廢娼令を公布させている。彼の弟は吉郎（半月）、子どもは一郎（洋画家）、八郎（元同志社総長、元國際キリスト教大學総長で哲学、昆蟲學專攻の理學博士）らがいる名門である。國會開設請願の上毛十四郎總代人の一人として名を連ね、自由民権運動に参加した齋藤王生雄（嘉永五、大正一二）もキリスト教徒となつて東北・北海道方面に牧師として活躍しており、佐波郡名和村出身の森川抱次（明治二、昭和三一）は養蚕、蚕種業に従事すると共に救世軍に入隊、廢娼運動、足尾鉍毒事件、水平社運動に關与したほか、上毛孤児院、養老院、県立盲啞學校の設立に尽力したが、同じように製糸業經營のかたわら、キリスト教普及のためには活躍した人に前橋の深沢雄象（天保四、明治四〇）、利重（安政三、昭和九）親子がおり、利重は共愛女學校設立のために努力している。このように明治期の殖産興業時代に、養蚕・製糸をはじめとする産業經營に根をおき、町村、郡、県、國政に關与し、さらに學校等教育機關（明治二十年代に流行した英學校の經營を含め）に力を入れ、社会事業面にまで関心を持った一連の指導者にキリスト教徒が多かつたことは注目すべきことである。

同じ宗教界にあつて、仏教關係者の中には社会の底辺に注目し、恵まれない子ども達に救いの手をさしのべた者があつた。高崎市長松寺の住職山端息耕（明治二、昭和四〇）は、明治三十六年樹徳子守學校を、また前橋市松竹院の明臺榮泉（明治五、大正一一）は自

敬子守養成所を明治三十八年に開設している。当時公立學校にも子守學校が設けられた所が多く、就學奨励対策の一つであつたが、樹徳學校の場合は昭和十九年まで永續した。

### 三 詩人王國

上州は詩人の國である。明治期以降我が國の代表的な詩人が多く、坂東太郎や恵まれた自然環境にはぐくまれたところである。碓氷峠に近い松井日町下増田に生まれた磯貝雲峰（慶応元、明治三〇）は本名内田由太郎といひ新体詩人であつた。同志社に入学、歌人の池袋清風に師事したが、後に新体詩を研究した。スコットの影響を受けたといわれる「知盛卿」を「女學雜誌」に發表したり、小説、評論、訳詩を書いた。雲峰の新体詩は島崎藤村の「若菜集」の母胎にもなつていられるといわれる。湯浅半月（安政五、昭和一八）は安中の有田屋の生まれで湯浅治郎の弟。幼少から漢詩を学んだが、新島義の同志社創立を機にそこに学び、明治十八年の卒業式の席上、旧約聖書から取材した自作叙事詩「十二の石塚」を朗誦した。その年に自費出版されたこの詩集は我が國最初の新体詩集である。アメリカから帰國後同志社教授を経て京都府立図書館長として図書館の分類法を研究、十進分類法は彼の考えによるものといふ。

明治から大正期にかけて活躍した人にまず石原和三郎（慶応元、大正一一）がいる。赤城東麓の勢多郡東村花輪の出身で、師範學校卒業後、郡内の校長を経て上京、東京高師付小にいたが、富山房に入社して教科書の編さんにあたり「兎と亀」「金太郎」「浦島太郎」「花咲爺」や「上野唱歌」など、言文一致の唱歌を数多く作つ

た。我が國の創作民謡の創始者といわれる平井晚村（明治一六、大正八）は前橋市本町の生まれ。報知新聞記者として武俠物などを書いてきたが、婦郷後詩や歴史小説、少年少女小説を執筆した。詩集「野葡萄」「麦笛」「茶摘歌」などのほか紀行文「湯けむり」「小品集」「白菊物語」がある。ほぼ同じ時期に山村暮鳥（明治一七、大正一三）がいる。本名木暮八九十、群馬町棟高の出身。犀星、朔太郎らと人魚社を起したが、第一詩集「三人の処女」は伝統的な流れの中で自然をみていたが、宗教的感情と未來的傾向の強い第二詩集の「聖三特玻璃」は理解を示したのは朔太郎と犀星だけだった。生活性の充實していた時期を経て、人道主義的世界へ入り「雲」にみられる生活意識の徹底的な單純化に至つた。

近代詩の至峰、萩原朔太郎（明治一九、昭和一七）は前橋市の医師長男として生まれた。前橋中学校時代早くも文才をあらわして、校友會雜誌「坂東太郎」を編集、詩を發表している。岡山の第六高校に進んだが中退して詩作に専念するようになった。室生犀星、北原白秋とも交友があり、これらの詩人もたびたび來橋している。



萩原朔太郎

大正六年二月の第一詩集「月に吠える」は当時の詩壇にショックを与え、特異な感覺的、官能的な世界を形成した。その後「青猫」「永島」などに代表される詩集で近代詩の代表的位置を占めることになった。例

年五月、前橋で開かれる朔太郎忌には全国からファンを集めている。朔太郎、犀星と共に白秋門下の三羽鳥といわれたのは磯部温泉に生まれた大手拓次（明治二〇、昭和九）である。ポードレルとサマンの影響を受け、神秘的な幻想と柔軟、感覺的ななしかも個性的表現が特長であり、特に抒情的で音楽的な表現は朔太郎の「青猫」にも影響を与えている。詩集「藍色の墓」「蛇の花嫁」があり、最近全集も編まれた。これらに対して萩原恭次郎（明治三二、昭和一一）は當時の大正期の社会情勢を強く反映した社会主義的傾向を示した特異な立場の詩人であつた。ことに大正十四年の第一詩集「死刑宣告」はアナキズムの思想的立場を明らかにしたもので、近代詩の變革をもたらしたものと注目すべきものである。第二詩集「断片」は昭和六年に刊行された。

高橋元吉（昭和二六、昭和四〇）は前橋の書店煥乎堂高橋常藏の次男で、詩人尾崎義八、朔太郎、倉田百三、吉野秀雄、高田博厚、武者小路実篤らと交わりがあつた。「遠望」「耽視」「耶律」などのほか高村光太郎賞を受賞した「高橋元吉詩集」があり、求道的な思索の中から精神的に新鮮な作品を残した。以上のほか朔太郎に師事した岡田刀水士（明治三五、昭和四五）や、清水房之丞（明治三六、昭和三九）がいる。

詩人が多いのに比して散文の分野で活躍した人は極めて少ない。短詩型文学の國といわれるゆえである。明治期の自然主義文学の代表的な人に田山花袋（明治五、昭和五）がいる。花袋は東毛の館林藩の士族屋敷に生まれ、利根川畔や湖沼の多い風土に根ざした作品を多く書いていく。明治四十年の「蒲団」はパトマンの「淋し

き人々」の影響が強いといわれ、当時の文壇に大きな衝撃を与えた作品であり、「田舎教師」「生」「妻」などの代表作がある。「返らぬ過去」「悲しき微笑」「武蔵野巡礼」などを書いた白石実三（明治一九〇昭和二二）は安中の出身で、花袋の愛弟子であった。江見水蔭の江本社に加わり、花袋と同門であった山口寒水（明治一七〇明治三七）は、十八歳で執筆した「水採人夫」が読売新聞の新年短編小説の募集で一席に入選しており、同じ年、勢多郡下で発行していた横野の華」に農民文学の先駆的作品「桑一枝」を発表しているが、これは長塚節の「土」より七年も早い時のものであったが、わずかに二十一歳でこの世を去った。岩野泡鳴に師事した中沢静雄（明治一八〇昭和二二）は高崎市倉賀野の出身、「没落」「喘ぎ」「ある女の家出」などの作品がある。女中物を得意とした伊香保温泉出身の森田素夫（明治四四〇昭和三六）は昭和十七年の芥川賞候補作品「冬の神」を書いており、高崎市出身の橋外男（明治二七〇昭和三四）は「ナリン殿下への回想」によって第七回直木賞を受賞したが不遇のまま他界した。なお松井田町小日向の出身である横田桃水（明治二三〇昭和二三）は上京後小学校長のかたわら少年倶楽部口演部主任として「桃水インッ」「蜘蛛の命」などの童話作家であった。風刺作家として知られた生方敏郎（明治一五〇昭和四四）は沼田市出身で早大卒業後、読売新聞日曜文芸評論で健筆をふるい。時局や社会現象、軍部や政治問題まで対象に風刺的な角度から鋭くつき、「源氏と平家」「明治大正見物史」「哄笑、微笑、苦笑」などの外、大正八年の中央公論誌上の「悪獣国見物記」は当時の政界を皮肉ったものとして知られている。

#### 四 歌壇・俳壇

群馬の風土は短詩型文学にびたりしており、古来その温床であった。万葉集の東歌にも上野国は二十五首をかぞえていたが、生氣あふれる歌人が出現してくるのは明治後半以降である。山田花袋や萩原朝太郎も一時和歌をつくっているが、本県に影響を与えたのは「水上紀行」の若山牧水の来県、「霸王樹」の橋田東声の指導以後である。大正から昭和期にかけての本県の歌壇のリーダーは須藤泰一郎（明治二二〇昭和八）と大沢雅休（明治二三〇昭和二八）である。泰一郎は橋田東声の「霸王樹」から「アララギ」の土屋文明の指導を受け、歌集「瑞垣」「言霊」があり勢多郡粕川村膳の農家の出生であり、家弟の藤岡林城（明治二四〇昭和一一）も歌人であった。雅休は大類村柴崎（現高崎市）の出身で、小学校教員のかたわら大正十二年野菊社を結成、本県歌壇に大きな影響を与えたが、大正十五年上京、書道芸術院を起して前衛書道の祖となった。同じく小学校教員のかたわら「キツネノス」を刊行した北原放二（明治二五〇昭和一八）は、上京、東大附属図書館に勤めて、尾山篤二郎の「短歌雑誌」の編集を手伝った。高崎市の商家に生まれ、慶応大に進んだが中退し、早くから胸を病んだ吉野秀雄（明治三五〇昭和四二）は会津八一、松岡静雄に師事、万葉集と正岡子規を尊敬し、写生道を信奉した。歌集、随筆集を収めた「吉野秀雄全集」全九巻があり、豪放な一生は映画化されたことがある。吉田緑泉（明治二八〇昭和四六）と「アララギ」の伊藤左千夫の所へ入門させた土屋文明の高崎中学校時代の恩師村上成之（鮎魚）も歌人であり、明治



吉野秀雄

四〇年から大正十三年まで在職した。文明は群馬町保渡田の出身で東京帝大哲学科卒、松本高女で教壇に立ったあと明大教授、歌集は「山ゆくさ」以後多数あり、「万葉集私注」二十巻ほか著作が多い。利根郡川場村の江口きち（大正二〇昭和一一）は昭和六年に河井醉茗、島本久恵夫妻の「女性時代」に投稿したことから作歌が始まったが、不遇な環境の中で二十六歳という若い命を自ら絶たたと十四年に刊行された「武尊の麓」によって世に紹介されて有名になった。

#### 五 学者・教育者群像

一方俳壇では明治三十年に前橋市に倉田萩郎（明治二一〇大正一五）らによっていなめ会が始められ、後に前橋市十二代市長となった関口雨亭（明治一五〇昭和三三）や平井晩村も加わった。村上鬼城（慶応元〇昭和一一）は江戸に生まれ、前橋市から高崎市へ移住、三十歳から裁判所の代書人として生活した。早くから正岡子規と文通しており、「ホトトギス」には明治三十年から投稿している。貧乏と孤高な生活の中で句作を続け、境涯の作家といわれている。県下には十一基にのぼる鬼城句碑が建っている。佐波郡境町に生まれ、多野郡鬼石町に育った長谷川零余子（明治一九〇昭和三三）は薬川風骨、内藤鳴雪、高浜虚子らと「ホトトギス」で活躍していたが、大正九年「枯野」を創刊、立体俳句を提唱してホトトギスから独立した。現在では歌壇の群馬県歌人クラブ、俳壇の群馬県俳句作

家協会に結集し、多くの結社が活躍し、まさに白花繚乱のいきおいである。

日本における美学の創始者として知られるのは勢多郡笈井村（現前橋市）生まれの大塚保治（旧姓小屋・明治元〇昭和六）である。当時県内唯一の群馬県中学校卒業後、東京帝大哲学科へ進む。留学の後、東京帝大教授として我が国で最初の美学講座を担当した。独自の立場における体系的考察は学問の方向を決定的なものにした。また彼は明治四十年秋からの文展（文部省美術展覧会）の創始者の一人として参画し、高村光雲らと彫刻の部の審査員となっている。保治の妻は夏目漱石とほりあった末迎えたという楠緒子で、日露戦争中の反戦的長詩お百度詣の作詩者としても有名。美術界の指導にもあたった心理学者松本亦太郎（慶応元〇昭和一九）は高崎藩士飯野翼の次男で、倉賀野の松本家へ養子入りした人。明治二十六年東京帝大哲学科卒業後、ユール大とライプティヒ大で実験心理学を専攻、帰国後京都帝大と東京帝大で実験心理学の講座を担当した。著書には「精神動作学」「実験心理学十講」「知能心理学」などのほか「絵画鑑賞の心理」「現代の日本画」があり明治四十三年には文展の審査員として活躍している。京都帝大総長として十五年間もその職にあった荒木寛三郎（慶応元〇昭和一七）は碓氷郡板鼻（現安中市）の出身。東京帝大卒業後、ドイツで生理学を専攻した。昭和期に入っては学習院長、枢密顧問官などの要職にあった。現在でも市内の学校には彼の揮毫になる書額が掲げられている。大正十

五年以後二期の東洋大学長に就任している哲学者の中島徳蔵(元治元〓昭和一五)は佐波那今井(現伊勢崎市)の出身。東洋倫理・哲学・易学・心理学・社会学という広い領域に通じていた遠藤隆吉(明治七〓昭和二一)は旧前橋藩士の出身。京都帝大教授、文博となり、日本社会学研究所を創設している。「大日本地方財政史」や「経済と人生」の著書があった中島信虎(慶応元〓昭和一二)は安中市岩井の中島家の生まれである。歴史学の分野でも何人かの学者がいる。四十年間も東京高師教授をつとめ歴史教科書の編さんで有名なだった峯岸米造(明治三〓昭和二二)は現前橋市力丸の出身で、検定試験で小学校訓導、校長を勤め、群馬師範から東京高師に学び、卒業後県立高崎中学校の創設に当たり、上京した苦学生であった。高崎に生まれた中村孝也(明治一八〓昭和四五)は群馬師範から東京高師へ、更に東京帝大国史科へ進み、江戸時代を専攻、処女作「江戸幕府鎖国論」以来百余冊の著作、雑誌「歴史と趣味」を自ら刊行、大正十五年の「元禄及享保時代における経済思想の研究」で文学博士、「徳川家康文書の研究」全四巻で学士院賞を受けている。明治大と東京帝大教授、史料編纂所長を勤めた。一方民間にあって「真説日本歴史」「江戸の風俗」「やくざ考」などの著作をもにした田村栄太郎(明治二五〓昭和四四)も高崎市の出身であった。角



中村 孝也

授、史料編纂所長を勤めた。一方民間にあって「真説日本歴史」「江戸の風俗」「やくざ考」などの著作をもにした田村栄太郎(明治二五〓昭和四四)も高崎市の出身であった。角

田金五郎(安政五〓昭和一八)は赤城山を中心にした蘇苔地衣類(コケ類)の研究家として知られ、「ジャポニカソノダ」「ナベワリインシス」の苔類新種の発見があり、現在でも万余の植物標本が残されている。太田中学や館林農学校、同実科女学校同中学校教諭として東毛の湖沼を研究、明治三十八年多々良沼でムジナモを発見し、天然記念物指定の基となったのは高野貞助(慶応三〓昭和一九)である。タカノホシクサの発見に次いでこの地域の肝臓ジストマの研究にも当たった。高崎藩の重臣堤克寛の四男で小学校長、師範学校教師などを歴任した堤辰二(安政三〓明治三八)は「上野史談」や「植物教授本」「動物教授本」「鉱物教授本」の三連作の著作があり、当時の県下学校で採用された教科書である。世界的な動物学者として知られた飯塚啓(明治元〓昭和二三)は子持山麓の村上出身。岡山の第六高校、東京帝大、学習院などで教授として活躍、ミミズの研究が主で、「飯塚動物発生学」の名著がある。沼田藩士久米醇齊の子である久米民之助(文久元〓昭和六)は皇居二重橋の設計者として知られる工学博士。郷里の沼田城跡を寿楽園として公園化し、沼田町へ寄附している。勢多郡赤城村の出身で日本学の角田柳作(明治一〇〓昭和三九)がいる。明治四十二年ハワイ中学校長をしたあと渡米し、昭和三年にロンドン大学日本文化センター所長として日本研究所を設立、日本の思想史、歴史、古典文学などを教えた。弟子の中にはジョージ・サムソン、エンブリー、ハーバート・ノーマン、ドナルド・キーンなど日本研究者が多い。月本最後の和算家といわれる萩原禎助(文政一〓明治四二)は前橋市関根町の人。群馬師範の教師のあと東京帝大理科大学に勤務して和算

書を研究、「算法方田鑑」「算法円理私論」「円理算要」などが著作である。戦後ラジオ数学講座を担当、受験の神様とまでいわれた独学理学士森本清吾(明治三三〓昭和二九)は前に述べた深沢利重の子で、大正六年勢多農林学校を卒業したあと全くの独学で、理博を獲得、早大、群馬大教授にまでなった人である。以上の外、県下における教育者列伝にちなる人に渋川郷学の完成者といわれた堀口藍園(文政元〓明治二四)や、渋川小学校長を永くつとめ、全国小学校長会副会長の要職にあり、私塾の渋川郷学研究をライフワークとした田部井鹿蔵(明治一三〓昭和三〇)などがある。また養蚕県として蚕の飼育は農家の大きな課題であったが、清温育を發明し、藤岡に養蚕伝習所(後に私立高山社養業学校に発展)を設立した高山長五郎(元保元〓明治一九)、赤城山南麓の原之郷の船津伝次平(天保三〓明治三一)は明治十年から二十年まで東大農学部の前身である駒場農学校に勤め、日本農法の基礎づくりを伝え、以後全国を巡回して指導に当たった篤農家である。

## 六 女性指導者の活躍

明治期の産業、経済、教育面での発展の過程にあって各方面で女性の活躍がみられる。ことにその分野ではなくてはならぬ幼稚園教育、裁縫教育などの面での活躍が目立っている。高崎の深井仁子(天保二〓大正七)は明治十一年に国振学校で子女教育に当たっており、明治末期には深井幼稚園を併設している。幼稚園教育では高崎幼稚園の前身である明治十九年の高崎第一尋常小学校村附設の開講室でその保母にあたった堤きよ、本県私立幼稚園第一号の明治二十八年

開園の前橋市清心幼稚園の広瀬恒子や黒田サチ(明治二三〓昭和四六)、原市赤心幼稚園の太田捨(明治四〓大正七、神戸頌栄幼稚園保母伝習所の第一回卒業生)、藤岡幼稚園長になった小泉たね(明治五〓昭和三五)、大正十四年設立の安中教会付設二葉幼稚園の二代園長となった湯浅とみ(明治一〇〓昭和二九)などがこれに当たり、キリスト教関係者が多いのが特色としてあげられる。女子教育、裁縫教育面では、明治三十九年私立裁縫女学校(現在佐藤学園高校)を創立した佐藤夕子(明治八〓昭和二八)、同二十九年鈴木裁縫(後に明治裁縫と改称)の鈴木たま、同じく三十四年桐生女子裁縫専門学院を設立、今日の桐ヶ丘女子短大の基礎づくりをした長沢幹子、同じく三十七年前橋和洋裁縫女学校の柳下とみ、大正三年太田に常見裁縫伝習所(現在の私立常盤高校の前身)の常見ろく(明治一二〓昭和二九)などがある。津久井磯子(文政一二〓大正七)は明治二十一年前橋に上毛産婆学校を設立、産業面では、永井紺周郎の妻いと(天保二〓明治三七)は、永井流養蚕伝習所の経営に積極的に参加しており、富士見村出身の小淵しち(弘化四〓昭和四)は豊橋市二川町に明治二十五年に糸徳社という三河遠江地方特産の玉糸座繰製糸工場を建て、三遠玉糸の恩人とまでいわれた。明治一十五年上毛孤児院を設立した金子尚雄の妻金子おなじ(明治六〓昭和三九)、藤岡市神田の出身で、縋物織の發明家として名をなした萩原まさ(明治一七年生)なども社会の発展に寄与した人々である。

## 七 出版言論界の雄

講談社を設立し、世にいう講談社文化を普及するのに貢献したの

は桐生市新宿に生まれた野間清治（明治一〇～昭和一三）である。学生服姿の先輩八木昌平に魅かれて教師になろうとして群馬師範に入學、小学校に勤務したが、東京帝大臨時教員養成所を出て沖繩県立中学校に赴任、県視学にもなったが再び上京東京帝大法學部の首席書記を勤めたが、明治四十二年大日本雄弁会を創設して「雄弁」を發行した。そして講談社を設立、国民雑誌をめざした「講談俱樂部」を發行、大正期に入って少年、面白、婦人、少女俱樂部を次々と發行、大正十四年には出版界の常識を破る宣伝でキング、次いで幼年俱樂部と、九大雑誌を完成した。出版王といわれるゆえんである。昭和五年には報知新聞の経営にも乗り出しマスコミへの進出をはかった。大正から昭和にかけて県内の学校長等から引抜かれて入社する者が多い状態であったという。独舌家として鳴らした阿部真之助（明治一七～昭和三九）は富岡市の生まれ、県立富岡中学校第一回卒業生で、東京帝国大学社会学科を卒業したあと満州日々新聞社を創設、東京日々新聞社で「近事片々」と執筆、毎日新聞主筆、NHK会長などをつとめた。言論界の第一人者であった。独学で毎日新聞社取締役になった上原虎重（明治二三～昭和二六）は松井町



石 堀 藤 佐

北野牧の出身であり、高露みつの実兄でもある。随筆家として知られた佐藤堀石（本名亀吉）は群馬郡の出身、釣を主軸とし、酒と食味とを売物にした。それまでの「絵入群馬日報」や「上野日報」を合併して上

毛新聞を創刊（明治二〇年）したのは篠原叶である。武蔵国忍藩の剣道師範であったが明治六年熊谷県出版局長、群馬県出版局長になって出版業に入るようになった。上毛新聞は昭和十五年県下唯一の日刊紙となり、上州新報、上野新聞、群馬新聞も統合し、その基礎を固めた。

#### 八 絵画、彫刻、書道

日本最後の南画家といわれた新井洞毅（慶応二～昭和二三）は吾妻郡原町の出身、明治十八年に菅原白菴、高森碎巖に師事、末期には韓国、台湾、中国へ渡って技をみがいた。同じく南画界に貢献した人に小室翠雲（明治七～昭和二〇）がいる。足利の田崎草雲について学び、三十年代には名を高めている。「梅花双喜図」が一等に入選、正流同志会を結成した。大正三年以後文展審査員となり、更に帝國美術院、芸術院会員、昭和十九年帝室技芸員となった。代表作には御物寒林幽居、瀟足万里流、振衣千仞岡などがある。岸浪白舄居（明治二二～昭和二七）は翠雲の弟子であり、文展、帝展に出品した。磯部章丘（明治三〇～昭和四一）は伊勢崎市の出身。大正九年上京して川合玉堂の門下に入った。大正十三年帝展初入選、昭和九年帝展の「葉月汐」が特選、翌々年文展無鑑査となった。戦後は日展に出品している。法隆寺金堂壁面の模写に従事した大塚操山（明治四～昭和一九）は吾妻郡の出身であった。

洋画ではまず湯浅一郎（明治元～昭和六）がいる。安中の湯浅治郎の長男。同志大卒後東京で山本芳翠、黒田清輝らに師事、明治二十九年東京美術学校を卒業して白馬会の創立に参加、渡欧してペラスケスに傾倒、スペイン画風の影響を強く受けた。榛名南麓の箕郷

町に生まれた山口薫（明治四〇～昭和四三）は東京美術学校油絵科を出たあと渡欧、新時代自由美術家協会、戦後にはモダンアート協会を創立している。南画風の発想で、独自の色彩で叙情誌を描く手法に特色がみられる。

彫刻界では奈良良で古仏修理に当たり、前橋公園の彰忠碑のトビを彫った細谷而染（明治一一～昭和一五）、啞の彫刻家で牛を最も得意とした中平四郎（明治二四～昭和二四）、高崎観音山の白衣観音の原型をつくった森村西三（明治三〇～昭和二四）などがある。

書道では利根の三筆といわれた高橋不可得（文化元～明治一八）、江戸に出て高林流の祖といわれた高林二峰（文政四～明治三〇）、日下部鳴鶴、巖谷一六と共に明治の三筆といわれた金井之泰（天保四～明治四〇）は佐波郡島村の金井島州の子、内閣書記官から大使元老院、貴族院議員になった人である。

#### 九 芸能界

江戸松平藩陣屋に生まれ、慶応三年藩主前橋移封と共に前橋へ移住した内田桑太郎（文久元～昭和一六）芸大音楽学部の前身である文部省音楽取調掛の第二回卒業生、群馬県師範学校初の音楽教師として県下に輝かしい足跡を残した。三十五年には東京音楽学校助教と授として上京している。「上毛の歌」作曲家である。「日本民謡大観」の大著がある民謡研究家で国の文化財保護審議会専門委員である町田嘉章（佳声）（明治二二年生）は伊勢崎の出身、ハーモニカの宮田東峰、我が国音楽教育界の重鎮井上武士は共に前橋市の出身である。日本舞踊に近代、レーの要素を取入れて新舞踊を創作した花柳徳兵衛（明治四〇～昭和四三）は高崎市の出身、本名寺崎孝太

郎、十七歳で花柳徳の輔門下に入り修業、昭和九年「釈迦と魔女」でデビュー、昭和二十九年の芸術祭賞を得た「慟哭」で彼の地位を不動のものにした。箏曲と作曲の宮下秀列も高崎市の出身、高崎中学校卒業の時熱病のため失明、東京盲啞学校に進学、萩岡松韻、宮城道雄、田辺尚雄に師事、昭和二十四年「双調の曲」で文部大臣賞、二十八年「平家物語による幻想」で文部大臣奨励賞を獲得した。

#### 十 郷土史研究家

三百号に及ぶ「上毛及上毛人」を大正三年以降発刊した豊田覚堂（慶応元～昭和二九）は群馬県郷土研究会の代表的人物である。多野郡日野村（現藤岡市）の僧家出身で、上京後新聞記者をしていたこともある。元来は博物学教師であった岩沢正作（明治九～昭和一九）は神奈川県出身、明治三十五年前橋中学校に赴任後地方史研究に首を突っこみ、本県考古学の草分け的存在となり、「毛野」「毛野時報」を主宰したほか、「山田郡誌」の編纂に当たり、県史跡名勝天然記念物調査委員として活躍した。名著「桐生織物史」のほか「山田郡誌」「吾妻郡誌」「桐生市史」「群馬県史」にも関与した八木昌平（明治九～昭和三九）は太田市宝泉の生まれ、東京高師卒業後、蕨山中学校へ赴任、更に本県吾妻高女、藤岡女、館林女、桐生女に校長として勤務した。和算の研究や、「上毛文化」「群馬文化」を主宰した丸山清康（明治三四～昭和四一）、民家の研究実績をのこした矢島胖（明治二八～昭和四三）らも郷土史研究家であり、相川考古館を創設した伊勢崎相川之賀（慶応二～昭和二五）や、金沢佐平同淳父子（吾妻町）らも考古学資料の蒐集に意を注いだ人たちである。（群馬県教育委員会文化財保護課文化財第三係長）

人物を中心とした

# 文化郷土史

— 埼玉 県 —

柳 田 敏 司



## はじめに

関東平野の中央部に位置する埼玉県は、古くは東國の大國、武蔵國に属していた。天正十八年（一五九〇）八月、徳川家康が関東の支配者として江戸城に入府、まもなく関ヶ原の合戦で勝利をおさめ、征夷大將軍となつて江戸に幕府を開いて完全に天下の支配者となつたのは慶長八年（一六〇三）のことである。それ以後江戸は政治の中心都市として發展するが、埼玉県はお藤元としての嚴重な制限を受けた支配をされるようになった。県内は天領、旗本領、藩領（岩槻、忍、川越の各藩）に細分され、領主の數も二千人をはるかに越していた。米麦などの農作物の他に、江戸に住む、武士・町民のため、野菜をつくり、供給していた。練馬大根、入間ごぼうなどはその例である。

反面、江戸に近かつたので文人墨客の來遊も多く、また好學の士が上京し、勉學に励んで大成した者も多い。盲目の國學者塙保己一、梵語學者盛典、狂歌師元奎綱などはその代表例である。

県内にあつた岩槻、忍、川越の各城は江戸に近いという地理的條件、軍事的要素から三万〜千石という小祿ではあつたが居城する城主は親藩、譜代の大名が多く、また大老、老中等幕府の要職に就いた者が多かつた。松平信綱、柳沢吉保、大岡忠光、阿部忠秋、堀田正盛、阿部重次等多數にのぼっている。これらの大名は江戸から文人、學者を呼び寄せ、領内の教化にあたらせているのも一特色と

もいえる。

江戸のお藤元にあるとはいへ、多數の小領主により細分化されたため、住民が一致して大事にあたるという団結心は薄い反面、他國者であっても、これを排せきすることなく、迎え入れる包容力に富んだ氣風を持っていたといわれる。これは一つには広大な農地を持ち、換金作物をつくつていて生活にゆとりがあつたためかも知れない。

明治維新に際してもとくにめざましい活躍をした人物も見当たらない。どちらかというと幕府方としてみられ、官軍と稱する薩長軍からは警戒されていた。明治期に活躍した人々も新政府が軌道にのつてから頭角をあらわすようになった人たちである。実業界の王と稱される渋沢栄一もはじめは幕府方にあり一橋家に仕えていたものである。

明治の新政府は江戸を東京と改称して首都とし、従来の武蔵國は東京と埼玉に分割（一部は神奈川縣）されたが、名称が変わつただけで埼玉県にとっては首都の近郊という地位は変わらなかつた。地方から青雲の志をいだいて上京し、學成り故郷に帰る者、東京に住み着く者も多かつたが、近郊の本県に定住する者も多かつた。

## 美術

川越藩のお抱え絵師橋本家の子として天保六年（一八三五）七月二九日に生まれた幼名千太郎は、後に岡倉天心らとともに東京美術



橋 本 雅 邦

学校を設立し、また日本美術院を創設し、日本画の伝統をまもり扱いた橋本雅邦である。雅邦は七歳のとき、画筆をとり、十三歳のとき、狩野雅信の門に入り、師の一字をもらひ雅邦と名乗る

ようになったといわれる。二十歳にして芳崖の後をうけて塾頭となつた。幕末動乱の際は江戸から川越に移つて難を避けていた。絵の制作だけでは生活も貧困を極める時世であつた。明治四年（一八七二）海軍兵學寮の製図教師となつて一家を支えていたが、明治十五年第一回の内國絵画共進会に出品した「竹に鳩」が認められ、十八年には文部省図画取調掛委員になつた。この頃から岡倉天心と深くつき合うようになり、意氣投合して日本美術界發展のために東奔西走するようになった。明治二十一年東京美術学校を設け、教授に就任、二十三年には帝室技芸員に推され、ますます日本画に精進、「白雲紅樹」「釈迦十六羅漢」「竜虎」などの大作を発表している。

明治天皇の御婚式に際しては「松上双鶴」を奉獻している。明治三十一年美術学校を去り、やはり岡倉天心とともに日本美術院を設立、後進の育成に尽力し、日本画に新風を送りこんだ。門下生には下村綱山、川合玉堂、横山大観ら明治画壇の重鎮がいる。パリ万博、セントルイス万博等に出品するなど日本を代表する作家として

活躍したが明治四十一年一月十三日七十二歳で東京本郷の自宅でこの世を去った。

同じ頃女流画家として注目されていた人に奥原晴湖がいた。晴湖は下総(茨城県)古河藩の士、池田繁右衛門政明の四女として生まれ、幼名をお蝶といた。七歳のとき節子と改め、両親が「せいこ」と呼んでいたことから後に号を「晴湖」と称するようになったという。

絵を谷文晁の門下生であった牧田水石に学び、二十八歳のとき奥原左衛門の養女となり、字を静古、晴湖と号した。慶応二年(一八六六)江戸は上野の下谷摩利支天横丁に居を構え、墨吐烟雲楼と称していた。同四年彰義隊の乱の際は、一時埼玉県の熊谷に避難したが、争乱が静まると再び上京、鄭板橋の画風を学び、木戸孝允、伊藤博文などの支援をうけ名声を高めていた。たまたま皇后の御前で揮毫をご覧にいれ、その腕前を賞され「雨端の硯」を下賜されている。明治二十四年住居が上野駅に近く、鉄道建設によって敷地になったことから、かつて難を避けていた熊谷市の上川上に移住し、以後大正二年七月二十八日、七十七歳の生涯を終わるまでこの地に住み、田園にかこまれ、自然の風趣に親しんで世を送った。詩書、宋、元、明などの南画を愛し、自らも詩、書、画の一致の画境を深め、人物、山水画を得意とし、作品を多く残している。近代初期の代表的な女流画家といえよう。遺作は書、画とも県内に数多く散在している。

舞台装置をはじめ行っているから舞台装置家としても認められこの方面でも第一人者として大いに活躍。歌舞伎の熊谷出陣、大菩薩峠、振袖火事等枚挙にいとまなしの状況であった。他に時代考証、木版画家としても日本画とともに数々の作品を生み芸能界、画壇で精彩を放っている。

洋画壇では斎藤豊作(一八八〇~一九五二)、森田恒友(一八八一~一九三三)、倉田白羊(一八八二~一九三八)、斎藤与里(一八八五~一九五九)等明治十年代生まれの画家が輩出している。

斎藤豊作は越谷市(大相模村)に生まれ、東京美術学校卒業後、フランスに渡りラファエル、コランに師事し、帰国後第七回文展に出品した点描風の作品「落葉かき」「夕映えの流」は当時の画壇に大いに注目されたものである。

有馬生馬、梅原竜三郎、坂本繁二郎、石井柏亭らと二科会を創立し、鑑査委員となって活躍、大正三年有馬夫妻の仲介によりフランスの女流画家カミュー、サランソンと結婚した。大正八年再びフランスに行き、サルトル県ヴェネヴェルの古城に居を構え制作を続ける一方、日本からの留學生の世話に当たり、有馬生馬、山下新太郎、岡鹿之助らの画家を迎え接待している。第二次大戦中は抑留生活を送っていたがあまり作品は発表していない。

森田恒友は大里郡玉井村(熊谷市)に生まれ画家を志して二十歳のとき上京、小山正太郎の同舎に学んだ後、翌年東京美術学校に入學した。石井柏亭、山本鼎と三人で雑誌「方寸」を創刊したのは

日本画家としてよりは挿絵画、舞台装置家として著名な小村雪岱は川越の郭町で生まれた。五歳のとき父は病死、六歳で母は実家へ戻り、孤独の子となった。伯父、伯母の援助をうけ苦勞の未明治四十一年東京美術学校日本画科選科を卒業した。在学中古画の模写をや



小村雪岱筆「おせん」

っており、自然と古美術に造詣が深かった。卒業後は国華社につとめていたが、泉鏡花の知遇を得た。大正三年に出版された小説「日本橋」の装丁が雪岱の処女作であったが、非常な評判となり、以後鏡花の単行本の大部分は雪岱の装丁になっている。挿絵としては里見弴の「多情佛心」の小説にかいたのがはじめてで、大衆文芸の盛んになった大正末期の頃である。雪岱が挿絵画家の第一人者として不動の地位を築いたのは昭和八年の邦枝完二執筆の新聞小説「おせん」のさし絵執筆からである。日本画特有の線を十分に生かした、簡潔で、上品で、春信風の美人画は他の追随を許さなかった。以後「忠臣蔵」をはじめその作品は多数にのぼっている。また大正十三年浅草の公園劇場で「忠直卿行状記」の

二十九歳のときである。北原白秋、木下杢太郎ら詩人グループと「パンの会」を起し、ローマン主義文芸運動にも参画している。

雑誌サンデーに世相風刺の漫画などをかいていたが、長女喜代が生まれると制作に専念するようになった。大正三年フランスに渡り、セザンヌに傾倒し、自然の中に真実美を求めた絵を発表「初夏の巴里郊外」「リオン郊外」「シンガポール」「マレー人」などの傑作がある。帰国後二科会、日本美術院等に所属していたが、大正九年頃からおもに水墨画、素描を発表することが多くなった。大正十一年には梅原竜三郎、中川一政、岸田劉生らと春陽会を創立。絵は郷里の田園に取材したものが多く、「利根川畔」「溪流」「取手風景」「ポプラの林」「利根川堤」が代表作品として残されている。大正四年帝國美術学校(武蔵野美術大学)の創立されるや洋画科の主任教授となり後進の育成に努力した。

同じ明治十四年に浦和で生まれたのが倉田白羊である。兄の後をおって浅井忠の門人となり、東京美術学校卒業後、教師、新聞記者などをしていたが、第一回文展に「つゆばれ」を出品。雑誌「方寸」の刊行に森田恒友、石井柏亭らと参画している。大正三年小笠原島に移り制作に専念、翌年東京に帰り、日本美術展洋画部同人となった。大正七年に次男文作が生まれた。(文化庁鑑査官を経て現在奈良国立博物館長となっている)大正十一年春陽会の設立に参加、日本農民美術研究所の仕事を援助するため、居を信州に移し、そこで創作活動を行っている。田園、山村風景を主としてかき、重厚な

作風を示している。埼玉会館に所蔵されている渋沢栄一翁米寿の肖像画は白羊晩年の作であるが、生き生きとした筆致をみせている。

森田、倉田両画家は埼玉の生んだ同世代の洋画家として、東京美術院、院展洋画部、春陽会と所属も同じであり、またともに田園風景を



齊藤与里の作品

愛したのも共通する等、奇しき因縁である。

この兩人より数年遅れて加須市で出生したのが齊藤与里である。与里も倉田と同じく浅井忠に師事した。同門に安井曾

太郎、梅原竜三郎らがいた。二十歳(明治三十九年)のとき、フランスに留学ポール・ローランスのアカデミー、ジュリアン大学にて後期印象派、野獸派の絵を学び、日本人の感覚で体得し四年後に帰国した。

大正元年フューザン会を結成、七年には矢野橋村らと大阪美術学校を創設して後進の育成に当たった。太平洋画会、文展に出品、同志と槐樹社を結成するなど日本画壇に新風を送りこんでいたが、特に昭和七年に結成した東光会は会員数も多く、その影響は大きい。

臣實の栄に輝いている。なお長老格として奥瀬英三がいる。好んで田園、山村風景をかき、自分の個性をまげることなくかきつづける態度は賞賛されているところである。

絵から出発して近代漫画の祖といわれている北沢楽天(一八七六〜一九五五)は大宮市の出身である。福沢諭吉に才能を認められて時事新報に入り、「時事漫画」として風刺、ユーモラスを生命に社会風刺を紙上に発表し続けた。従来のポンチ絵という言葉で漫画という名称にした創始者である。明治三十八年「東京パック」を発売し多くの子弟を輩出した。弟子たちのため自家を開放、「クロッキ一教室」と称して弟子の世話をしている。松下井知夫、西川辰美、根本進、小川哲夫、田中比左良、小川治平、下川凹夫などがそれぞれあり、また坂本繁二郎、山口蓬春、川端電子、石井鶴三らの画家もそこで育った人たちである。昭和三年、フランス旅行の際、フランスから勲章を授けられているのも面白い。戦後は郷里大宮の「楽天居」に住し、悠々自適の日を送っていた。

楽天のグループに入り「ノンキなトウさん」、「只野凡児」等の漫画でならした麻生豊(一八九八〜一九六一)も晩年は浦和に住み、教育委員などの公職についていた。現在も岡部冬彦らの漫画家がいるのも伝統がものをいうのであろうか。

## 彫刻

彫刻界に眼を転じると、まず近代銅像彫刻の祖といわれる大熊氏

与里も農家の生まれであったためか農村風景を好んで描写したが、そこに登場する人物はふくよかな、清純で暖みがある。太平洋戦争中は戦争に反対して郷里に引き移り、「草香居」を中心にして農村を題材に描き、「晩秋の赤城」などの傑作を発表している。郷里の人々に絵を教える傍ら絵筆を振る晩年であった。

埼玉出身ではないが居を県内に構えて活躍した画家も多い。跡見泰(一八八四〜一九五三)は大正十四年から浦和に住んでおり、黒田清輝に師事した白馬会員である。また裸婦を描きつづけて四十余年、昭和二十五年に芸術院賞、同三十五年には芸術員会員となった寺内萬次郎も昭和九年以来三十九年に他界するまで浦和市針ヶ谷のアトリエの住居で生活していた。埼玉県美術家協会の初代会長をつとめ、県内美術家を一丸とした団体にまとあげた功績は大きい。その他白馬会洋画研究所で黒田清輝、中沢弘光の指導をうけ、ヨーロッパに遊学の後、浦和に永住した小林真二(一八九〇〜一九六五)。春陽会員で、大杉栄らアナキストと交際し、第六回二科展に「大杉栄像」を出品して警視庁から撤去を命ぜられた林徳衛(一八九五〜一九四五)も浦和に居住していた一人である。

このように、画壇の大家が多数住んでいた浦和の地には、現在も高田誠、渡辺武夫、齊藤三郎らの現代画壇の第一人者が後を継いで活躍している。高田誠は一水会に属して点描画に新境地をひらき文部大臣、芸術院賞を受賞、県美術家協会会長をつとめ、渡辺武夫は光風会に、齊藤三郎は二科会に属して、ともにその作品は内閣総理大臣(一八五六〜一九三四)がいる。氏廣は鳩ヶ谷市大字三ツ和の農家、伝右衛門の次男として生まれ、十八歳の明治九年、工部美術学校第一回生として彫刻科に入学、イタリヤ人教師のラギーザについて学び、十五年首席で卒業した。明治十九年渡欧、仏、伊で彫刻の研究を積み、二十三年の暮に帰朝、依頼されていた大村益次郎の銅像制作に着手し、二十六年に完成した。日本で最初の銅像であり、日本人の手によりつくられた記念すべき作品である。氏廣はこれ他岩崎弥太郎、有栖川宮熾仁親王、伊藤博文、福沢諭吉等の銅像を制作している。内閣勸業博覧会、シカゴ万博の鑑査官、審査員、文展審査員をつとめている。上野公園内にある東京国立博物館表慶館の入口に、見学者を迎えているライオンの像も彼の作品である。大正から昭和にかけて高村光雲と双壁をなした小倉右一郎(一八八一〜一九六二)は関東大震災後は大宮市に居住していた。代表作に「不惑」「行人」があり、作風は穏やかで、暖かみがあり多くの人に親しまれた。

浦和に住んでいた中野四郎(一九〇一〜一九六八)は東京美術学校彫刻科で高村光雲に師事、後埼玉大学で教えていた。木彫、石膏、銅造と各作品があるが、ふくよかな表現の作品が多いのは若い頃天平彫刻に熱心だったせいかも知れない。創元会の創立に骨を折り、会の重鎮であった遺作のうち何点かは県立博物館に展示され県民に親しまれている。

書道家諸井春畦(一八六六～一九一九)は児玉郡本庄町(本庄市)で諸井家の三男として生まれた。本名を時三郎といい、実業界で身を立てようと上京した。早くから書に親しんで天分をあらわしていたことから、長じて西川春洞に師事して才能が益々發揮され、推されて明治書道会の会長となった。それから各種書道界の世話役となつて後進の育成に尽力している。著書に「書法三角論」、「楷書恰好論」、「書家宝典」がある。なお実兄の恒平は秩父セメント・秩父鉄道などの社長をしていた実業家である。

春畦より遅れて山麓の寄居町に生まれ、書の道で名をあげた人に菅谷幽峰(一八九二～一九六〇)がいる。近藤雪竹について学び昭和十年鐘雲書道会を起し、書道雑誌「春墨」を創刊し、多くの書家を啓発するところが大きかった。日本書道美術院、新日本書道院、日展等の審査員となり、また県書道連盟の会長として書道界の振興につとめたりしている。温厚で重厚・活気にみちた作品が多い。

他に小菅秩嶺(一九〇八～一九六六)、木村剛石(一八六一～一九三八)などが教鞭をとりながら後進の指導に当たっており、服部北蓮は長いこと埼玉師範、埼玉大学の書道の教師として指導育成に当たっておりその功績はまことに大きい。

文学関係の学者として筆頭にあげられるのは河野省三(一八八二～一九六三)である。省三は北埼玉郡駒西町の古社玉敷神社の神官の子として生まれた。国学院大学卒業後、母校の埼玉中学校教諭となり、神官としての仕事にも従事していた。生来読書家であり、また文筆もよくした。家を離れることに反対していた母が亡くなつてから間もなく、大正四年、招かれて国学院大学で教へんをとることになつた。神道の研究、普及、



河野省三

日本精神、国民道徳等に関する論文、著作は数多く、当時第一人者であった。昭和十年国学院大学の学長となり、精神作興運動の推進教科書調査官等各種の委員、役員を歴任した。戦後は教職追放の身となり、玉敷神社官司として晴耕雨読の生活をしてきたが、昭和二十七年、県神社庁長として神道の再建に尽力。戦前の宗教界の指導者として果たした役割は大きい。追放解除後は再び大学で教へんをとり、国学の振興推進に当たっていた。

この国学者河野省三の家に預けられ、埼玉中学校に通って勉強していたのが西角井正慶(一九〇〇～一九七〇)である。正慶は小ざ

いときから省三の薫陶を受け、長じて国学院大学で古典を研究、特に歌人としても名高い民俗学者折口信夫について研さん、その系統

を受けついだ人である。古典芸能、郷土芸能に通じていたが、なかでもその大著「神楽の研究」は名著として評価されている。正慶は武蔵一の宮水川神社の神官、西角井家の長男として生まれたことから、神事行事、宗教文学関係の子弟は全国に散在し、活躍している。

東京帝国大学在学中、「帝國文学」の編集に尽力した石坂養平(一八八五～一九六九)は哲学や芸術を論じ、斯界に矚目されていたが、家が素封家であつたことから政界に身を投じ、国政、県政に参画することが多くなり文学界から遠ざかつたのは惜しまれる。

薄幸の女流歌人三ヶ島霞子(一八八六～一九二七)も所沢市の神官の子として生まれた。十一歳頃から歌を作りはじめ、七五調で日記を書いていたという。埼玉女子師範に入ったが胸を患って退学。療養しながら与謝野寛、晶子に師事「青踏」に作品を発表していた。その後島木赤彦の門に入り、一層洗練され、真実に溢れた作品をつくるようになった。しかし友人のことから破門され、更に追いうちをかけて、夫は愛人とともに去つて行った。病弱な霞子は更に心臓病、肺炎におそわれ、大正十三年に脳溢血に倒れる不幸が続いた。短かい生涯は身体的、精神的、経済的に恵まれない境遇であつたが、その中から真実の声を吐露した作品が多く生まれている。

俳人長谷川かな女(一八八七～一九六九)は女流俳人として大成し、機関誌「水明」を主宰していた。女らしさを素直に表現した句

は多くの同好者を生み、育てている。

## その他

日比谷公園の設計など造園、林学方面で第一人者とたたえられ、林学博士第一号となつた本多静六(一八六六～一九五七)も苦勞の人であつた。九歳のとき父を失い、十三歳で上京、十七歳で東京山林学校(現東大農学部)に入学、卒業後ドイツのミュンヘン大学に留学、帰国後、東大に勤め、三十二歳の時林学博士の学位を得た。防雪、防風林、観光施設などの自然保護に尽した功績は大きく、庭園協会長、森林会長にも任じている。所有地の山林を県に寄付、本多奨学金の財源となつている。

他に大衆小説作家として雪之丞変化を著した三上於逸吉(一八九一～一九四四)や、東京音楽学校を卒業し、文部省在外研究員としてドイツに留学し、ベルリン音楽高等学校でパウ・ヒンデミットに師事して作曲法を研究、帰国後我が国音楽界の作曲、理論にわたつて大活躍した下総皖一(一八九八～一九六一)も本県の生んだ人である。管弦楽、室内楽、声楽の各部門にわたつて多くの作品があり、紀元二千六百年の祝典序典の作曲も彼の手になるものである。芸能界には榎本健一、左卜全、五月信子、清水元等がいる。

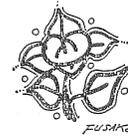
本県の特色としては中央に出て活躍するものと同時に、地方から東京に出て名をあげ、本県内に居住する文化人が多いことがあげられる。(埼玉県教育委員会文化財保護課長)

人物を中心とした

## 文化郷土史

— 千葉県 —

川 戸 彰



一 はつめじ

千葉県はふるく安房・上総・下総の三国よりなり、下総の一部は現在の利根川を越えた茨城県の西南部や埼玉県の一部にまで広がっていた。

明治四年（一八七四）の廢藩置県後、安房と上総は木更津県に、下総のうち葛飾・印旛・千葉・下埴生・相馬・猿島・岡田・結城・豊田の九郡が印旛県の管轄下におかれ、下総国の東部にあたる匝瑳・海上・香取の三郡は土浦に県庁をもつ新治県に所属していた。明治六年六月十五日、木更津県と印旛県が合併して千葉県が誕生し、県庁が千葉町におかれた。本年は、まさに千葉県が誕生して百年目に当たる記念すべき年となっている。しかしながら、現在のごとき行政区画が策定されるには、明治八年五月七日をまたねばならなかった。すなわち、この年を期して新治県が廃止となり、その管轄地は千葉県と茨城県の二県に分属された。下総の東部の三郡（匝瑳・海上・香取）は千葉県に編入されたが、一方、利根川を越えてのびていた相馬郡の大部分と猿島・岡田・結城・豊田の四郡がそれぞれ茨城県に、さらに葛飾郡の一部が埼玉県に所属することによって今日の千葉県の行政区が確定した。

近代的な地方行政区の誕生をみる以前、換言すれば、江戸時代の本県の姿相はどうであつたらうか。

房総の地は、江戸幕府のお膝元に近く、佐倉藩一二十万石を最大とする若干の例外を除くと、いずれも一、二万石の譜代小藩に属し、この小藩と旗本知行所・天領等が複雑に交差し、かなりの小村の中

にも何人かの領主によって分割支配される事例もみられ、名実共に、犬牙錯綜の観を呈していた。このような支配体制が、その後の千葉県民に及ぼした影響を見逃すわけにはいかない。

もともと氣候温暖で、海の幸、山の幸に恵まれ比較的暮らしやすかったことが、房総人をして粘り気のない安逸な人格（パーソナリティ）に育てあげたことはいなめない。この自然的な条件に加えて、江戸時代の分割支配の結果は、人心の統一を困難にし、他面排他的な傾向を助長して、それがかえって保守的で事大主義的な体制に順応するようなタイプの人間をつくりあげたように考えられる。

先学によって指摘されているが、房総人氣質とは、積極的・戦闘的な人物は稀でどちらかというと、弱気で非社交的な面が強く、神経質であるという。まじめであるが、小成に甘んずる風が強く、概して不撓不屈の精神を持った努力家は少ない。また、思想性が浅く、哲学者、文学者（小説家）が育ちにくい土地柄のようであり、風土性というべきであろう、あまりにも天恵にめぐまれすぎてかえって潜在的能力が十分に發揮されずに終わった面が多々あったように察知される。

このような弱点をもつ房総の地にも、江戸時代において、佐倉藩や、河川・海上交通を通して江戸に接触しやすかった佐原や江戸湾岸の木更津等を媒介として、学術文化の発達がみられたことを特記しておかなければならない。

## 二 佐倉藩学の系譜

佐倉藩の藩校は、寛政四年（一七九二）好学の藩主として名高い

堀田正順の時代に温故堂と称し、佐倉城下宮小路麻賀多神社の南に設立された。藩士の子弟のみならず、門戸を一般に開放し儒学を授けられた。三代のうちの幕末きっての外国通と称えられ、対米交渉の重責を担った主座老中として人口に膾炙されている堀田正陸の時代に、儒学中心の小規模な教授機関であった温故堂を、天保七年（一八三六）成徳書院の名称のもと整備拡充しつつ、儒学以外に武術・兵学・医学・蘭学などをとり入れ、さらに文久二年（一八六二）より蘭学から英学に転換をみたことは注目されてよい。当時の佐倉は、「西洋堀田」とか「西の長崎」に対して「東の佐倉」といわれ、泰西新文明の淵藪として多くの人材を養成したことはあまりにも有名である。

成徳書院の教官や出身者の中で、近代日本の発展に寄与せる有能な人物を瞥見してみると、まず医学関係では佐藤泰然の養子となつた佐藤舜海（尚中）に指を折らねばならないだろう。

佐藤舜海は、下総国や小見川藩主内田侯の藩医山口甫偲の次男として文政十年（一八二七）に出生。若年にして江戸にのぼり、寺門静軒に儒学を学び、その後医師安藤文沢について医学をおさめた。文沢は、舜海が非凡なる人物であることを察し、天保十三年（一八四二）十六歳の時、江戸薬研堀で開業していた蘭医として名高い佐藤泰然の門下になることをすすめた。翌十四年、師泰然が、佐倉藩主堀田正陸の招聘によって佐倉に移住することになったが、この時舜海も泰然に従って佐倉に移った。泰然は正式な藩医としてではなく、客分として待遇されており、ために私立病院を設けて順天堂と称し、すぐれた手術の実施による治療と良医の養成につとめられ

た。この順天堂こそ、本邦私立病院の嚆矢となったものである。この間、山口舜海は泰然より厚い信任をうけ、泰然が正式に藩医に就任してられた嘉永六年（一八五三）にその後嗣子を迎えられた。安政六年（一八五九）泰然の隠居によって家督をつぎ、翌七年成徳書院医学局の教授となる。万延元年（一八六〇）三四歳の時、幕命によって長崎に遊学し、オランダの軍医ポンペについて西洋医学を研究し、のちには、長崎養生所においてポンペの代講をつとめる程になったという。文久二年（一八六二）佐倉に帰り、長崎での体験をもとに医制改革を建議する。この結果、漢方が廃されて洋方が採用された。医学局の職制が改められて、一・二・三等医師の制がしかれ、舜海が一等医師として医学局を総督することになり、藩営の病院ともいべき佐倉養生所が建設された。明治に入り、同二年（一八六九）新政府は舜海を大学大博士として迎え、大学東校（東京大学医学部の前身）を主宰せしめた。翌年大典医を兼任、この頃大学東校においてドイツ人教師と意見があわず明治五年東校を辞任する。この後に、東京に順天堂病院を開き、その基礎をかためて明治



舜海

十五年（一八八二）五十六歳の生涯を閉じた。佐倉藩医学は、泰然・舜海の二代にわたり「外科医学」のメッカとして、ここに笈を負って入門す



樹茂

東京深川に塾を開きながら著作に従事する。六年四六歳の時、森有礼・福沢諭吉らと明六社をおこし、思想家として著述や演説を通して大幅な活動をなす。こ

の頃の思想界の動向をみると、欧化思想摂取に急で、行き過ぎた面が認められ、国民道徳確立のため、同志と謀って日本弘道会の前身である東京修身社を創設する（明治九年に設立、明治十七年日本講道会となり、さらに明治二十年日本弘道会と改称）。また、明治六年以降文部省に出任し、明治十三年には編輯局長として小学修身書の編纂にあたる。明治十七年には宮内省出任となり、宮中顧問官や華族女学校長を兼任し、貴族院議員に勅選せられる。

彼の業績の中で忘れてならないものに明治十二年に着手した「心事類苑」（百科辞典）百巻の編纂がある。その他著作としては「心学講義」「徳学講義」「日本道徳論」などのほか訳書には「万国史略」等がある。明治三十五年病没されるまで、終始国民道徳心の興隆と倫理思想の普及発達に尽された人物である。なお余談になるが、日本で最初の製靴業をおこし、製革法を研究した西村勝三は茂樹の実弟である。

津田仙は、佐倉藩士小島良親の四男として佐倉城内の天神曲輪に生まれた。のち幕臣津田栄七の婿養子となる。ペリーの来航を機に

るものがあつた。近代日本医学の発展に寄与するところ絶大なるものがあつた。佐倉順天堂は、舜海の養子岡本道庵（二代目佐藤舜海）によって受け継がれ、一方東京順天堂は、養子でドイツ外科医学をわが国に導入した高和介石（佐藤進）によって経営された。なお、東京順天堂は戦後順天堂医科大学を併設し、医師の養成機関として発足をあげたことは周知のところであろう。

ちなみに、佐藤一門の中には、泰然の三男林重は外務大臣等を歴任し、政治家として活躍。四男松本順は幕医松本良甫の後嗣となり、陸軍軍医総監をつとめる。尚中の嗣子、進は、ドイツに留学し、帰国後は舜海をたすけて順天堂病院の経営にあたったことは前述の通りである。のち本務の傍ら東京大学第一、第二病院の院長となり、さらに軍医総監を歴任する。彼の妻、すなわち舜海の長女志津は、今日の女子美術大学の前身、女子美術学校の校長として女子教育に尽力されたことも逸すことができない。

次に、蘭学と英学についてふれてみると、この分野からは西村茂樹（一八二八〜一九〇二）や津田仙（一八三七〜一九〇八）の輩出がある。

西村茂樹は、佐倉藩士西村平広衛門の長男として江戸藩邸において出生。安井息軒、海保漁村等に儒学を学び、二三歳の時大塚蜂郎に西洋砲術を、さらに佐久間象山に入門して洋学を学ぶ。はじめは砲術の修業につとめたが、のちには蘭学・英学に傾倒し、特に英学を重視するようになった。

慶応元年（一八六五）佐倉本藩に勤務し薩藩置県まで藩政を担当する。明治四年十一月、印旛県権参事に任ぜられるも翌年辞職し、

語学の勉強が急務であるとして蘭語・英語の学習に励んだといわれる。慶応三年（一八六七）特使小野友五郎の随員となって福沢諭吉らとアメリカ各地を視察・特に農業の重要性を痛感して帰国する。築地ホテルにつとめて西洋野菜や果実栽培に手を染め、またウィーンの博覧会に出席してオーストリアの農学者グエニェル・ホイフレックの指導をうけて帰国、農学書「農業三事」を著し、明治八年に労農社を麻布に創立し、翌年日本最初の農学校といわれる労農社農学校を開校、「農業雑誌」の発刊につとめる。

キリスト教の洗礼をうけてからメソジスト派婦人宣教師と共に青山学院女子部の前身救世学校を創立し、その他盲啞教育にも力を尽した。日本最初の女子留学生であり、津田塾大学の創設者で、日本の女子高等教育の先覚者として名高い津田梅子は、仙の二女である。父仙の先見の明と決断とがなければ、天性のすぐれた能力は十分に生かせなかつたかも知れない。

前記の外、佐倉藩出身者の中には、洋画の高橋由一（一八二八〜一八九四）、浅井忠（一八五六〜一九〇七）、演劇の依田学海（一八三三〜一九〇九）がよく知られている。

高橋由一は、佐倉藩士の家に生まれた。はじめ狩野派の絵を学んでいたが、ある時友人よりみせられた西洋石版画の優秀さに刺激され、日本画と異なった雅趣のある洋画研究への道を歩むようになった。文久二年九月蕃書調所画学局へ三五歳で入学、頭取の川上冬庵に師事した。また、英国公使館付武官のワグマンについて画法を学んだ。明治四年大学南校の面科教授となったが、翌年辞職し、東京日本橋浜町に洋画の私塾「天絵楼」を創設し多くの門弟の養成に

あつた。天絵楼は明治八年に「天絵舎」と名称を改め、当時日本では珍しかった展覧会を毎年開催し、明治十二年には東京府認可の画学校「天絵学舎」として一層の発展を挙げた。原田直次郎・安藤仲太郎、日本画家の川端玉章・荒木寛政ら一五〇人を指導した。高橋の絵画の対象となった領域は、風景・人物・静物と広く、即物観照にもとづく写実様式を特色とし、静物画に秀作を多くのこされた。「蛙」「花魁」は彼の代表作である。

浅井忠は、佐倉藩士の子として江戸木挽町の藩邸で生まれた。七歳の時父を失い、佐倉にかえりて藩の画家黒沼槐山から花鳥画を学び槐庭と号した。明治五年東京に出て英学を学び、二歳にして国沢新九郎に洋画を習い、明治九年工部大学付属美術学校第一期生としてフオンタネージの教えをうけた。卒業後は同窓の小山正太郎と共に「十一字会」という洋画の研究団体をつくり後進を導いた。

明治十年代から二十年代にかけての日本の洋画は受難時代として幾多の艱難を秘めた。政府の洋画排斥、展覧会の出品禁止、東京美術学校に洋画科の不設置等全く不遇の歴史が綴られ、外遊する者、日本画に転向する者等四散する中で、浅井らは明治二十二年日本最初の洋画団体である「明治美術会」を結成して、日本画壇に対抗したり、日清戦争に従軍して戦況を写生し、洋画を普及させるための努力を重ねられた。

明治三十一年、東京美術学校の教授に就任、二年後に渡欧、帰国後京都高等工芸学校教授として関西に赴任し、関西美術院をおこした。「収穫」「春歌」の力作をのこし、門下からは石井柏亭・梅原龍三郎・安井曾太郎らが出た。浅井を助けた洋画家に都鳥英喜（一

八七三～一九四三）がいたことを付記しておきたい。都鳥は、浅井の叔父にあたる佐倉藩の馬術師範助八の子として生まれる。浅井の教えをうけ、明治美術会の結成に参画、浅井の京都赴任に伴い、これに従って京都に移住し、彼の助手をつとめた人物である。

かくて、佐倉藩は日本の洋画壇の黎明期に活躍した二人の先覚を世におくり、その源泉となったことにわれわれは、十分注目する必要がある。引き続いて、演劇界に新風を吹き込んだ依田学海についても、高橋・浅井に優るとも劣らない功績をのこされた。

依田学海は、佐倉藩士依田貞剛の二男として江戸佐倉藩邸に生まれた。儒者藤森弘庵の門に学び、川田剛と共に門下の二秀才と称せられた人物である、中小姓、代官などをつとめ、維新の際は江戸留守役であった。

明治維新後は、佐倉藩大参事となり、廢藩置県以降は修史局の編修官や文部省の役人を歴任し、明治十八年官を辞してから文筆に親しみ、翌年福地桜痴らと「演劇改良会」をつくり、ことに伊藤博文・井上馨ら政府高官に歌舞伎を認識させ、天覧劇のためにも努力した。市川團十郎や守田勘弥を後援指導し、脚本をかねて直接稽古の指導もされた。「吉野拾遺名歌書」「文覚上人勸進帳」等新史劇の先駆的な作品があり、演劇改良に功績をのこされた。

一方、伝統的な学問である儒学においてもすぐれた学者を世におくられた。すなわち、佐倉藩士で成徳書院の総裁となった平野知秋の弟の田中従吾軒と、またその弟の小永井小舟の二人が特に世に知られている。

従吾軒は、経書を深く究めて古詩古文に通じ、小舟は、幕吏小永

井藤左衛門の後嗣となり、万延元年（一八六〇）米国に赴き、のち浅草に濠西義塾を創立し、儒学を教授して子弟の教育に当たられた。

### 三 佐原の学芸

利根川水系が整備され、水上交通の発達につれて江戸や東廻り海運の物産を積荷した舟の往来が頻繁となり、香取・鹿島・鳥栖の三社詣の茶船によって江戸市民や文人墨客の来遊も年々増加の一途をたどり、沿岸の河岸は股賑を呈した。佐原を中心とする学芸の興隆は、利根川と切り離しては考えられない要素をもっている。ふるく、楢取魚彦・伊能忠敬・久保木清淵等をうみ、幕末から明治初期にかけて多くの学者、文人を輩出させた。

「北総詩誌」等の著作をのこして知られる清宮秀堅（一八〇九～七九）は、好学の父滄州の遺著に親しみ刻苦独学した。のちに、大槻磐溪は佐原の人物をあげて「清宮棠陰の博学、金田梅村の詩才、伊能頼則の和学は今世多くあらざ」と賛嘆したという。本居宣長や頼山陽を私淑し、国学者としても名があり、地理・歴史にも精通していた。その著「下総国旧事考」は最も心血を注いだもので三〇歳頃に執筆にとりかかり三〇余年を経て脱稿したといわれる。理財に長じ、道路改修、新田開発等にも尽力した。

先の大槻磐溪に褒賞された一人である伊能頼則（一八〇六～七七）は、国学者・歌人として名をなした人物である。文化三年佐原に生まれ、はじめ神山魚貫、小山田（高田）与清について和歌・国学を学び、家業の呉服屋を廃し、江戸に出て家塾を開き、国学・和

歌を教授した。明治二年大学の大助教に任ぜられて御前で「令義解」を講じた。のち佐原にかえりて香取神宮の小官司をつとめる。

門人の中には、小中村清矩を筆頭に、県内関係者としては木村正辞（一八二七～一九一三）・伊能泰蔵（一八四〇～一九一九）・鈴木雅之があげられる。

国文学者木村正辞は、成田の清宮家に生まれ木村家を継ぐ、明治二年大学助教となり以後神祇官、司法省・太政官・文部省に出任、文科大学兼高等師範学校教授を経て明治二十六年官を辞し、万葉集の訓詁の研究に専心し、江戸時代の国学系統の万葉集研究を大成し、しかも独自の説をたてた。また門下の伊藤は、香取神宮の祠官をつとめ、歌人として名高い。特に香取神宮の古文書の湮滅するを憂い、編さん刊行を企画し、その内容を世に紹介された先覚者である。

房総の各地には、江戸時代の中頃より俳諧が盛んとなるが、その一つの中心が佐原に求められ、幕末から明治時代にかけて県内を代表する俳人をあげることができ。

東旭斎（一八二二～九七）は、はじめ常陸の人高柳丁知に俳諧を学び、その死後江戸の人大江由誓の門に入って一家をなした。俳聖芭蕉の足跡をしい各地を吟遊する。その著書には、「明治五百題」「明治七百集」等がある。旭斎と同門に玉井二鳩（一八一五～七四）がいる。高柳丁知、大江由誓に学んで帰郷、蒼工藝を開き子弟の養成につとめた。

ほかに、佐原の人としては書家の柳田正斎を紹介しておかねばなるまい。名は貞亮号を正斎と称す。昌平齋に儒学を学んだが書を好

み、趙子昂・王羲之に傾倒して大いに学ぶところがあり、子は、半古といひ泰蘆と号して、書にすぐれ名声があった。孫の泰雲も書をよくし日展審査員である。

以上、北総の佐倉、佐原に輩出した人物を中心にその活躍ぶりを探ってきたが、他地方にも目を点しながら項目を追って県内全体を概観してみたい。

#### 四 文学の世界

文学関係にふれてみると、漢詩文の世界では、北総に多古町出身の並木栗水（一八二九～一九一四）・村岡良弼（一八四五～一九一七）がおり、南総においては、鱸松塘（一八二三～一九八）を看過することができない。並木は、二一歳の時江戸に出て、大橋訥庵の思誠塾に入門する。在塾七年にて帰省し、家塾を開き、かつ多古藩の招きに応じて世子に侍読する。維新後は官途につかず専ら子弟の教育にあたる。門下に俊才少なからず寺島直（大審院判事）・林泰輔（文学博士・東京高師教授）・五十嵐敬止（貴族院議員）・大須賀庸之助（衆議院議員）・菅沢真雄（衆議院議員・貴族院議員）等を出す。

村岡良弼は、幼にして学に志し江戸に出て水本樹堂の教えをうけ、明治二年昌平大学明法科学生となり、和漢の制度・律令を専攻する。新律綱領の編修に従い、刑部・司法官僚としての道を歩む。内閣制度なるに及び内閣記録課長として詔勅・奏議以下の文書の尚蔵、維新後の制度法令の編纂にあたり、明治二十五年官を辞す。「日本地理志料」の大著述に従い、私装七二巻の大冊を明治三十七

「アララギ」の発行所を東京に移して編集発行人となり、初期アララギの刊行につとめた。晩年は歌作ととに小説にも力を入れ、「ホトトギス」誌上に「野菊の墓」「隣の家」「春の潮」等を矢つぎ早に発表され、大正二年惜しまれながら五十歳でこの世を去った。斎藤茂吉、島木赤彦、土屋文明等はいずれもすぐれた左千夫の門下である。

古泉千樫も郷土の先輩である左千夫の門をたたいた一人である。彼は明治十九年鴨川市細野に生まれた。小学校卒業後母校の代用教員をつとめ、のち千葉の教員講習所に入所して小学校準指導の資格を与える。新聞「日本」の歌壇に投書をはじめ「心の花」に主力を注ぐようになった。左千夫を知るに及んでやがて上京し、アララギの編集同人として活躍、左千夫の没後発行所を自らのところに移し、しばらく同誌の発行につとめた。大正十三年「日光」の創刊に際してその同人となり、アララギを離れ、同十五年には青垣会をつくったが病床につき、雑誌「青垣」の発行をみず昭和二年四三歳で逝去した。

先述の日光の同人のなかに県内関係者として今一人、吉植庄亮（一八八四～一九五八）が名をつらねており、見落すことができない。

庄亮は、印旛郡本笠村下井に生まれ、一高から東大法科の秀才コースをたどる。中央新聞の記者をやっていた時もあったがまもなく帰農し、父祖四代にわたる開墾事業に従って五十有余町歩の原野を拓き、吉植新田としてこれを完成させた。昭和十一年から約一〇年間えらばれて衆議院議員となり中央政界に活躍する。歌の方は、明

年に完成させ、のち続日本後紀の校訂に心血をそそぎ「続日本後紀纂話」の著書に対して帝國学士院は恩賜賞をおくられた。大正六年病を得て世を去る。その著書は、四〇余冊におよび校正にあたりし書目八冊を数える。特に漢詩関係のものとしては「北総詩史」「櫛斎誌存」「良弼詠藻」等がある。

一方房州の鱸杉塘は、柳川昌殿の逸材として知られ、平淡にして温雅な詩をよくしたといわれる。叙景詩にすぐれ「松塘詩鈔」等がある。

和歌については、幕末から明治にかけて、田園歌人として晴耕雨読の生活をおくり「苔清水」等の歌集をのこされた神山魚貫や国学者加納諸平の教えをうけ、歌道に精進する傍ら万葉集の研究に業績をのこした海上胤平がで、明治後半からは伊藤左千夫（一八六四～一九一三）・古泉千樫（一八八六～一九二七）の活躍がある。

左千夫は、成東町殿台の中農程度の農家に生まれ、政治家を志して上京、明治法律学校に入学したが眼病のため半年で退学、その後自活のため、本所茅場町に牛乳屋を開業する。明治三十三年子規の



伊藤左千夫  
自由な表現の歌をつくり、歌人としての地歩を築いていった。子規の没後「馬酔木」を刊行、のち旧陸岡村壇谷の蔵真のもとで創刊された

治三十三年金子薫園に入門して白菊会をつくり、歌壇に新風をおこした。明治四十三年「橄欖」を創刊し、数次の起廢曲折をみたが、その中心として大きな役割を果たされた。

以上の三名は、近代短歌發展史上、大きな足跡をのこされたが、ほかに房総出身の歌人としては、鍬金家の香取秀興・アララギの発行にあたった蔵真、弟の蔵榎堂、従弟の蔵桐軒・白井大翼・矢代東村・細井魚袋等があげられる。その他、詩人としては、平木白星（一八七六～一九一五）が有名であり、俳句では、前田普羅（一八八五～一九五二）がよく知られている。

白星は、市原市姉崎の出身で、通信省等に勤務し文筆に親しむ。万朝報の新体詩欄の選者となり、誌人、劇作家として活躍する。前田普羅は、白子町市場の出身、ホトトギス誌に投稿し虚子に認められる。大正十三年報知新聞富山支局長となって富山に赴任し、「辛夷」の編集と発行を担当し、俳壇に指導的役割を果たす。

小説家として一家をなした本泉出身者は、比較的少ない。先の歌人伊藤左千夫を除くと、明治期では、嵯峨の屋お室（一八六三～一九四七）と國木田独歩（一八七二～一九〇八）があげられ、最近の人物では、立野信之（一九〇三～一九七二）・上田広（一九〇五～一九六六）が目立つ程度である。

嵯峨の屋お室は、下総国関宿藩士の子として生まれ、本名を矢崎鎮四郎という。外国語学校ロシア語科に学び、二葉亭四迷と交わり、坪内逍遙に入門小説家となる。明治前半の文壇で活躍し、浪漫主義文学の先駆的な作品を残された。後半期に活躍した銚子出身の國木田独歩は、国民新聞の従軍記者として書き上げた「愛弟通信」

で世に認められ、明治二十四年発表した「武蔵野」によって文壇に登場した。初期自然主義文学を代表する人物となったが肺結核のため三八歳の短い生涯を閉じた。

立野信之は、千葉県人には珍しい直木賞作家である。市原市五井の出身で、東京中学在学中短歌に親しみ「国民文学」に投稿。同校中退後帰郷したが、大正十年短歌同人雑誌「曠野」を編んでプロレタリア文学運動をおこして「新興文学」を創刊し評論をかいた。昭和三年処女作「標的になった彼奴」で世に認められ、作家生活に入る。「戦旗」編集長、作家同盟書記長をつとめ昭和五年検査される。のち転向、自伝的な小説をかいていたが、戦後、現代史を取材した小説をかき、「叛乱」で昭和二十七年度下半期の直木賞を受賞する。上田広は、長生郡長南町出身、鉄道員から鉄道連隊に入り、華北に転戦、陣中で綴った「黄塵」などの戦記文学を書いて有名である。

## 五 房総の美術家たち

美術界をみると、明治初期に没した鈴木鵝湖をはじめ、猪瀬東寧、高森碎敏、根本樵谷等があり、やや降っては石井林響、吉田登穀等が登場する。鈴木鵝湖は船橋市金堀に生まれ谷文晁に入り門、人物、花鳥画をよくする。その子に石井鼎湖があり、石井相亭と鶴三は鼎湖の子にして鵝湖の孫にあたる。石井林響は、土気本郷の出身、橋本雅邦の門に学び天風と号した。林響と改称するにおよび兩面をよくし、晩年帝展委員となる。

彫刻では、小倉惣次郎（一八四五―一九二七）があげられる。木

更津市下郡に生まれ、上京してラギーザの門に入り、大理石彫刻を学ぶ。代表作には明治天皇、伊藤博文、大隈重信等の名作をのこす。

鑄金界では、香取秀真（一八七四―一九五四）、津田信夫（一八七五―一九四六）、工芸界では瀧川惣助（一八四七―一九一〇）の活躍がある。香取は印西町船穂の農家に生まれる。東京美術学校の鑄金科に入学し、大鳥如雲、岡崎雲声に学ぶ。美校教授、芸術院会員、文化財専門審議会委員を歴任し、昭和二十八年文化勲章を受章される。歌人であり、金工家としても令名が高い。津田は、佐倉の出身で香取とほぼ同時代に東京美術学校に学ぶ。卒業後母校の助教から教授となり、多くの後身を育成し、対外的には、工芸の地位向上のため帝展に工芸部設置の努力を重ねた。瀧川は、海上町の出身にして一八歳の時上京。小間物屋となる。ドイツ人ワグネルが七宝を作っていたアール・ヌーヴ七宝工場を買収し、有線七宝の方法に對して絵画をそのまま無線で表現する方法を創案し、七宝製作上の画期をなした。海外の博覧会に出品し、好評を得て著名である。

書道の方面では、わが国で最初の書道の学校である東京書法学校を創設した植竹雲邦、日下部鳴鶴門の香川松石、篆刻の大家石井雙石が知られている。

## 六 学界をめぐって（村言泉界）

明治期前半の高名な学者となると、やはり伝統的な要素をもつ国学や儒学系統の学者に限定される。国学者としては、市原市引田出身の立野良道をもって第一としなければならない。また儒学では、北総の芳野金隆、龜田鸞谷等が代表的人物といえよう。

明治の後半から大正・昭和にかけては、近代的な史学研究法を導入して新しい学問上の業績を残し、中央学界のみならず、房総の歴史研究の上にも指導的役割を果たした歴史学者の八代国治（一八七三―一九二四）、大森金五郎（一八六七―一九三七）、白鳥庫吉（一八六五―一九四二）をまずあげなければなるまい。八代は、市原市高根の出身にして国学院に入学し国史を学ぶ。東京帝国大学史料編纂所に勤務し、大正十一年母校の教授となる。特に荘園史の研究に新局面を開きその業績は今日でも高く評価され、「長慶天皇御即位の研究」で帝国学士院より恩賜賞を受賞された。大森は、長南町に生まれ、東京帝国大学を卒業後、学習院教授に任ぜられた。大正五年辞職し専心研究著述に従う。名著「武家時代之研究」は今日でも光彩を放っている。白鳥は、茂原市長谷の出身で千葉中学校において那珂通世三宅米吉の教えをうけ、この感化影響が後年アジア史を専攻することになったといわれる。東京帝国大学文科大卒卒業後、学習院教授に迎えられる、のち母校の教授となり、退官後は名誉教授となる。研究領域は広範にして満鮮・蒙古・西域・南海の歴史・地理・言語の研究に及



白鳥庫吉

び、日本・中国の上代史においても優れた論文を発表された。前人未踏の研究が多く、日本における東洋学の基礎を固め世界的水準にまで高め

た碩学である。ほかに本県出身の歴史学者としては、多古町出身の林泰輔が知られている。

紙数の関係で十分書き尽くせなくなったが、その他優れた業績をのこされた人物を瞥見してみると、学習院教授・東京高師教授（のちの文理科大）となり、「大日本国語辞典」五巻を上田万年と共編した松井簡治（銚子）、「日本音声学」の大著を世におくり、ゲンタルト心理学の權威として著名な佐久間鼎（東金）、「社会学新講」等の著書をもって知られる社会学者の松本潤一郎（銚子）などがあり、法学界では、大多喜藩士の子として生まれ、京都帝国大学法科大学教授から法科大学長となり、のち推されて京都市長となった井上密、明治大正昭和の三代にわたり学界だけでなく政界教育界にも活躍した茂原出身の鶴沢繪明が代表者としてあげられる。特に鶴沢は、王道思想を解明して注目され、東洋法律哲学の研究を主軸に政治哲学国家学に関する論文も多い。戦後は極東軍事裁判の弁護人を経て明大総長となる。自然科学の分野からは、文化勲章の受章者で知られる岡田武松が我孫子の出身である。東大物理学科を卒業後中央気象台に入り、大正十二年中央気象台長となる。日本の気象事業の整備と拡充にあたり、学者として「日本気候論」「気象学」等の著書をのこされた。日本歯科医師会の父と仰がれ、東京歯科医学院（いまの東京歯科大学）の設立者としてまた野口英世を大成させた恩人として有名な血脇守之助も我孫子の出身である。学界以外では、ジャーナリストの銚子出身の鈴木文史郎と市原出身の高石真五郎を逸することができない。

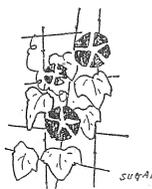
（千葉県企画部県民課県史係長）

人物を中心とした

## 文化郷土史

— 東京都 —

加藤善也



## シュール・レアリズムの土地

春の逃げ水、忽然と現れ、また消えては逃げる。関東ローム層、武蔵の国は、さきもりの土地、文化の先進国、朝鮮、中国から移住の民が次々と渡って来る。そして特異の民族をつくりあげる。もとは出雲系の民で、日本武尊の東征を受けた頃から、宮廷には、反抗的であった。その一番大きな力は、平将門の乱。あれだけいきおいの強かった勢力が、あっけなく亡んでしまう。熱するの速いが、さめるのも速い民族だった。平家の勢力のあと、源氏の勢力が伸びる。京の権力も、びにびに對して、関東は武家の本領を唱える。伊勢新九郎は今川家の居候から身をおこし、北条家を建てる。吉原開基の庄司甚左衛門の姉は北条家の妾だ。そして市川団十郎の祖先も武田家の士分だったらしい。徳川が天下をとり、浪人が巷にあふれる。三代將軍の時、浪人たちが指導した島原の乱がおきる。大鳥逸平太はかぶき者として江戸の武家たちを脅かした。同盟を結び、仲間がはずかしめられたら、主人といえども死をもって報いたからだ。

ご存じの通り、シュール・レアリズムは、今世紀フランスに興った最大の文学運動であった。アポリネールの演劇に、はじめて与えられた名である。シュール・レアリズムは、フロイディズムとマルキシズムを基盤として成立する。方法としては、笑、怪奇、幽幻、疑惑、否定、不合理、夢、狂気等が用いられる。

日本のシュール・レアリズム第一号は、市川団十郎であった。フランスの如くアンドレ・ブルトンという指導者がいなかったため、自然発生的であった。すでに武家の式楽は、猿楽の能という確固と

したものが、存在していた。それに対して町人の演劇は、まだお国歌舞伎と呼ぶレビュールしかもたなかった。江戸幕府がひらかれると金平節と呼ぶ荒唐無稽の人形浄瑠璃が存在する。初代団十郎はその影響を受けて、「荒事」と称するシュール・レアリズムを發明したのである。猿楽の能がすでに幽幻というシュール・レアリズムの先行芸術を用意していたから、発生もごく自然に行われた。フランスでもシュール・レアリズムの先行芸術は象徴詩であり、能は、象徴劇であったわけである。

女が男を相手に商売をはじめるとき、きまって男装が流行する。白拍子しかり。阿国歌舞伎が当たった時、お国は男の姿を真似して、刀や木刀を腰にしていた。吉原が女郎屋をはじめた頃、男の若衆まげを真似た島田まげが流行した。丹前風呂の湯女たちも、お国風の男装を真似た。江戸中期に栄えた深川岡場所からは、今まで男だけしか着用しなかった「羽織」を、女がはじめて着用する。豊後節系統の浄瑠璃がさかんになる。このあたりが、もっとも江戸らしい文化のさかんになった時期である。その頃、深川から鱈脊銀杏という髪がはやりだし、日本橋の魚河岸から市中に伝播していった。川と海の間、浅瀬をとぶように群れ泳ぐ鱈の子を「いな」と呼んだ。いなは深川あたりには群れなしている魚だ。背びれの少ない形が、まげに似ている。勢いのよいものとされていた。いなせの理念は、いきに似ている。いきより反抗的で、伝法に近い。いなせを上品にするときになる。

九鬼周造のイキの構造によると、媚態と意気地、あきらめの混合

物に、渋味と上品の気分が加わったものである。

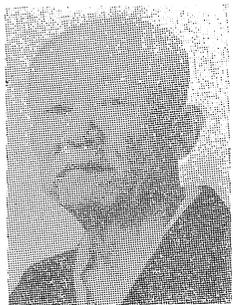
常磐津の「関の扉」が出た天明四年あたりがシュール・レアリズムの中期であると思う。歌舞伎の重中人重小町桜につけた音楽で、筋を言うと、逢坂山の関守宗貞のもとへ、恋仲の小野の小町が逢いに来る。途中、関守の関兵衛の所行を怪しんで、小野篁の所へ知らせにゆく。関兵衛実は大伴黒主であり、墨染桜を伐って天下を調伏せんとして、桜の精、実は傾城墨染となって、関兵衛の素性をあらわすという、いわゆる荒唐無稽の物語であった。荒唐無稽こそシュールのもっとも大切な要素である。長唄が、もっとも伝統の能を正しく受けつぎ、常磐津は、義太夫に一番接近していて、清元がもっともイキで、江戸文化を代表していた。

浮世絵と、日本のシュールである歌舞伎とは、その愛好的母体は同一であった。そしてその主導力は、母あ天下の女性であった。

明治になって浮世絵は捨てられて日本人からはかえり見られなかった。真の認識はフランスを中心にして欧米に起こる。何でも物真似の日本人は大正・昭和になってからあわてて、捨てたものを集めだした。しかし歌舞伎の方は言語の障害があって、浮世絵のように理解されなかった。しかし、いくばくもなく、ロシアの映画人によって発見された。エイゼンシュテインである。この天才は、歌舞伎の中からモンタージュ理論という一種のシュールレアリズムを発見したのである。

## 明治の曙

明治を境にして、日本は、新しいものと、古いものの二重構造と



伴露田幸

田成延は、幕府のお救寄屋坊主であったから、明治と共に扶持を離れて貧乏した。しかし後に下谷区長になる。郡司成忠はその次男、北方警備の重要さを考え、海軍大尉まで昇進したが、予備役に入り、同志を集めて報効義会をつくり、国防のため、北海に雄飛する。弟の成友は、学者、妹の幸田延（一八七〇～一九四六）、安藤こう（一八七八～一九六三）は、共に上野音楽学校出身のバイオリニストで芸術院会員だ。芥川賞を断って男をあげた高木卓は安藤この息子で、東大教授、オペラの作曲家である。露伴の娘の幸田文は、文学者、恐るべき一家だが、もし徳川家が續いていたら、このような人達は輩出しなかったであろう。



尾崎紅葉

露伴と並び称された小説家、尾崎紅葉（一八六八～一九〇三）も、芝中門前町の出身である。また山田美妙（一八六八～一九一〇）も露伴と同じ神田の生まれで言文一致の実践者ということになっている。

いう形をとる。

ら同人雑誌白樺派の人道主義の影響を受け、住む所も東京以外だったので、文学の神様というニックネームを奉られた。有島武郎、芥川龍之介、三島由紀夫と自殺者ばかり三名つなげて見ると、そこに亡びの美学めいたものを感じる。大正時代に生まれた東京の兵隊は弱かった。またも負けたか、歩一に、歩三とは、日支事変中の評判だった。強いのは、熊本六師団、広島五師団だったようだ。文芸評論家では小林秀雄を忘れてはならない。文壇の教祖的存在である。

山田耕筰（一八八六～一九六五）は日本における交響楽の草分けである。欧州では、越後獅子の作曲家と誤って伝えられていたこともある。若いころ浅草黒船町の黒船教会に寄寓していたことがあって、「黒船」という曲を作曲している。日本最初の世界的オペラ歌手三浦環（一八八四～一九四六）は芝で生まれた。幼時から邦舞、長唄、箏を習い、東京音楽学校に入学する。卒業して東京帝国劇場に出演したころは、河原者の中に入ったといっって批判された。当時はまだそういう時代だったのである。

音楽が出て来て、思いついたが、日本のシュール・レアリズムになりかかって、方向をまちがえてならなかったものに、浪花節がある。でろれん左衛門といって、まだ大道芸であった時代に、シュールの傾向があったが、惜しいことに、薩長連合政府の忠君愛国という理念とむすびついてしまっ、東京人にきらわれてしまった。台本なしの出たとこ勝負の出任せが惜しい。アメリカのジャズの発生と非常によく似ている。アメリカのシュール・レアリズムはモダンジャズである。はじめは、民族的差別を受けていた黒人の中から、

江戸の作者、為永春水の信奉者である永井荷風（一八七九～一九五九）は、代々の東京出身ではない。しかし祖先の縁者には、江戸に出て名をあげた詩人、学者が数多く存在する。荷風は、芝居、寄席、遊里に熱中した。六代目朝寝坊むらくの弟子となり、三遊亭夢之助を名乗る。荷風はまた歌舞伎作者となって、歌舞伎座に通った。父久一郎は名古屋の出身でアメリカへ留學する。母は鷺津殺堂の長女で、荷風は小石川金富町で生まれたが、下谷町の祖母の家で育つ。荷風が生粋の江戸っ子であるのは、墨東綺譚に情熱をかけたこととわかる。吉原や銀座



永井荷風

には、田舎くさいところがある。湯女、深川岡場所、玉の井、鳩の町には、下町のれんめんとした情緒が生みつけている。

吉原のことを書いたのは樋口一葉（一八七二～一八九六）。父は甲府出身の八丁堀同心、明治になると東京市や、警視庁につとめた。二十前に兄と父を亡くして貧乏する。

荷風に認められて文壇に出た谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）は、日本橋蠣殻町に生まれ、江戸っ子の伝統を受け、反道徳的だった。長生きして文化勲章を受けたことは、目出たいことである。

対照的人物として志賀直哉をあげて見る。宮城県石巻町に生まれしたが、幼児、両親と共に東京に移住して育ったが、東京帝国大学か

デキシーランドジャズが発生する。封建制下の町人や河原者たちの間から、歌舞伎が発生した状態とよく似ていた。しかしアメリカの場合は、途中から白人の参加によって、スイングジャズという似て非なる者に場所を奪われそうになると、今度は、レコードの吹込問題からストライキが始まった。それを機会に、モダンジャズという立派なシュール・レアリズムに自らの手によって軌道の修正をしたのである。フランスのシュール・レアリズムが使った自動筆記法とジャズのインプロビゼーションとは、同じ性質のものである。

洋楽の最後にハーモニカの川口章吾（一八九二～一九七四）を紹介しておく。庶民の中の庶民のための音楽に一生をささげた、この明治のハーモニカ吹きは、日本橋本石町で生まれ、父の失敗のため一家離散の苦勞を味わった。

### シュール・レアリストの子孫たち

日本のシュール・レアリズムは、幕末期に二人の天才によって、最終の華をかざることができた。鶴屋南北（一七五五～一八二九）と河竹黙阿弥（一八一六～一八九三）である。大南北は、ロマンティックな夢幻劇とリアルな写生劇とをこなし歌舞伎作者のナンバーワンである。東海道五十三次以下約百二十編の作品を残してくれた。次いで出た河竹黙阿弥も日本橋通二丁目に出生する。反道徳的な伝統をよく守り、白浪物という、悪の参加する劇を書いた。

江戸のもっとも江戸らしい鬱陶気をつくっていた深川は、天保二年の幕府の弾圧により、あっけなく消されてしまった。御禁制の伊勢音頭もきかなくなかった。いなせの中心的存在だった岡場所も

取りはらわれる。  
同時に芝居の方も浅草猿若町にひとまとめにされてきびしい監督を受ける。



明治になって、何もかも変ってしまったなかに歌舞伎だけは余り変らなかつた。九代目市川團十郎（一八三八—一九〇三）と、五代目尾上菊五郎（一八四四—一九〇三）の二つの大きな存在が屋台骨を支えた。それに名古屋から出て来たシェークスピア



学者の坪内逍遙の力が加えられる。しかし子供の時から名古屋で芝居に熱中したり、草紙類を集めてきた人も根が学者で科学的にものを考える人なので、所詮シェールの味は、わからなかつた。夢幻劇の弊を論ずるという論文をかいて、南北以来の伝統を歪めてしまう。

九代目市川團十郎の活歴も影響を受けて、新思想の史劇に江戸ッ子の評判は悪かつた。團十郎に比べられる名優に七代目市川團蔵がいたが、片意地な性格のため中央劇団に入れられず不遇に

終つた。四代目尾上松助は、脇役の名人といわれて、昭和のはじめまで活躍した。昭和に入ってから六代目尾上菊五郎の評判がよか

富本節、蘭八節、一中節、泣き節の元祖である新内等も、現在まで続いている。

俳優ではその他、市村羽左衛門、市川中車、中村勘三郎、尾上梅幸、尾上松緑、守田勘弥など代々続いている。変り種では、河原崎長十郎、中村翫右衛門がつくった前進座で、一同そろって共産党に入党している。

義太夫は関西が本場だが、豊竹山城少掾（一八七八—一九六七）だけ浅草馬道で生まれた東京人がいた。芸術院会員である。しかし長ずるに及んで関西の人となつてしまった。

現在、生きている俳優の中で、もっともシェール・レアリズムの演技のできる役者は、中村歌右衛門（一九一七—）であろう。

彼の演技の中には狂気がかいま見られるが、最近は何のせいも、い

たずらに虚空で壁土をこねまわす動作が多くなつた。彼もまた芸術院会員である。三島由紀夫によって芸がみがかれた。

俳優を家元とする舞踊の流儀も、坂東流、中村流、市川流、岩井流、松本流と数多く存在する。

この辺で、生きたままの人生が、そのままシェール・レアリズムであつた珍しい女性を紹介する。尾久で生まれた阿部定（一九〇七—）である。彼女も、またずい分と勝気であるが、新内で取り上げられ有名になつた花井お梅などから比べたら、ずっとさっぱりした性格のもち主である。お梅のように自我ばかり強い欲張りではない。可愛がつている芸人などには、かなり気前がよくふるまい、お人好しである。しかし芯のしまつた気っふのいい江戸ッ子の典型だ。男の一物を切りとり、そのまま逃げて、戦争の危機の迫つた非

つた。狂言舞踊の名人である。役者の名跡は、ほとんど芸の実力によらないで、血縁の者が次ぐしきたりになつていたので弊害も少なくない。そのために実力のある若手俳優が集まらなくなつてい

る。日本芸能の世界は、どこもこもこのような弊害が重なつてい

る。能の方面でも同じことがいえる。一子相傳だから、長い間、家の芸が続いてきたともいえるのである。大和猿楽の系統も近江猿楽の系統も、共に、徳川家に従つて、江戸に来て、今日でも続いているのである。

先代宝生九郎、桜間伴馬と共に明治の三名人といわれ、維新で能が衰えた時、芸を守つて修業につとめ再び隆盛に導いた梅若実の家はついに独立して一門を樹立できなかつた。一旦は家元を樹立したがまたもとの観世流に帰らざるを得なかつた。いまだに封建臭の消えない能楽世界のことである。そこにゆくと三味線音楽の方では、能よりいくぶんゆるやかであり、別に新しい流儀を建てれば、認められるのである。

観世流の能を歌舞伎の世界に、発展させたのは、長唄である。はじめは歌舞伎でも三味線が加わらず、能と同一の楽器をつかつていたらしい。長唄の家元は多士清々、鬼勝といわれた杵屋勝三郎、杵家正次郎、杵屋和吉、杵屋佐吉、杵屋六左衛門、芳村伊三郎、芳村伊十郎等々、数えきれないほどであるが、最近の杵屋正邦は新しい作曲方面で活躍している。常磐津は、文字太夫、林中、千東勢太夫が有名で各々子孫が活躍している。河竹黙阿弥に可愛がられた清元では、延寿太夫、梅吉等が活躍したが、女流作曲家にめぐまれていて、川口お直、清元税子がお葉など名曲を残している。他に河東節

常時の息苦しい世界に、グロテスクな笑いを投げつけた行為は、立派なシェール・レアリズムであつた。笑いは直観的な批判である。アメリカのシェール・レアリズムの根幹をなしているのは、ジャズの中の笑いだ。それにつけても残念なのは、浪花節にふくまれているシェールな笑いだつた。田舎者の発明品、忠君愛國とむすびついて

しまったのは、くやんでも足りない。浪花節の中で、関東節というものを確立したのは、浪花亭駒吉であつて、江戸の生まれだ。落語の円朝、講談の伯田と肩をならべて木戸銭をとつた彼は、人によつては、雲右衛門より上だといわれた。

東京生まれの創作童話の草分け巖谷小波は、東京出身の東武蔵の名づけ親である。

かいらい師、首にかけたる人形箱、鬼が出るか蛇が出るか、みんな己の心からシェールの文句を、吐いて捨てるように短く短く唱つた東武蔵は、まったく独得なあじわいがあつた。

### 新しい日本の音楽

戦時中、日本国中に流行つた浪花節は、広沢虎造の清水次郎長伝だつた。虎造は明治三二年東京芝で生まれている。彼は声が小さかつたので、レコードやマイクがなかつたら、このように流行児にはなれなかつたらう。

歌舞伎のシェール・レアリズムは、古い日本と共に亡んでしまつてしまつた。深川にはもういなきも何もない。地方からは年々人がやってくる。東京は次々と拡大されていって果てしないようだ。

歌舞伎がニューラルだといって認識を新しくするものもない。進取な気質も失われ、逆に古くさい懷古趣味に陥ってしまった。

日本の音楽を新しくした人達は、宮内省の雅楽部の人たちである。明治初年に、ほとんど東京に移住して来て、東京の人となる。

洋楽器を日本古来の楽器に併せ用いて、洋楽の普及に専心させる。誰が考えたのか、西洋音楽を移入する際、在来の三味線音楽家を選ばず、京都から楽人を連れて来たことは、まことに肯綮にあたいする。雅楽には、純音楽的理論がすでにあった。論理的な弁証法があった。それにひきかえ日本音楽の方は、すべて「型」によってとりしきる。音楽の場合の型とは、すなわち、約束ごとの言葉である。

実に無数の言葉があった。それが音楽の小さな単元に名付けられていた。作曲法を知らなくても、その無数にあるモナドを、つなぎ合わせて行けば、ちゃんとした。一曲の長い演奏を引きだすことも可能なわけである。全部暗記だから仲々ような業ではないし、不確かなところがある。

京都から来た楽人の名を挙げると、正四位上、東儀出羽守太素俊、齊、同じく奥豊後守泊好文、同じく林肥前守太素廣治、正四位下、窪越中守、同近繁、多安芸守多久頼等々以下八三名、その他在江戸楽人として一四人の名前がある。いずれも數等何々の守とつけ加えてある。

そのような新しく東京人となった京都の人たちにとって、江戸っ子とは、かなり奇妙なものに写ったにちがいない。

島崎赤太郎という人がいた。オルガンで洋行してきて音楽学校では、当時と島崎とすほどの方があった。この島崎が、御飯をたべ

る時、立て膝をしている。明治音楽会というものがあって、みんな旅行する。すると、島崎は涼み台に出て、足を組んで立て膝をし手拭をつまんで肩におく。その姿が何としてもイキな型で、京都から来た連中が、しきりに真似をするが、どうしてもかたが、つかない。すると、音楽学校の校長になった上原六四郎が、どこから聴いて来たのか、島崎は江戸っ子で、トンカチの職人だといふらし

た。トンカチとは大工のことである。つまり、京都で育ったものには、イキとは、仲々真似のできない洗練された姿であるという話だ。島崎は終身勲任官の待遇だったがもとは大工であったのだ。時代の曲り角には、思いもかけない珍妙なことが起こるものである。島崎の洗練された感覚が、明治期の洋楽移入に、役に立ったものであろう。

また母親が東京育ちなら、どんなに田舎の子でも、江戸っ子になつてしまふ。

芥川竜之介の息子、芥川也寸志（一九二五）は、作曲家である。東京芸術大学名譽教授の池内友二郎（一九〇六）は、愛媛県松山出身の俳人高浜虚子の息子だ。べらんめえ口調で講義をすること有名である。袈裟と盛達のオペラを作曲した石井欽（一九二一）も東京生まれだ。教会音楽の大中原二（一八九六）、文芸評論家と同名同名の小林秀雄（一九三一）は芸大講師の作曲家である。

東京生まれ、東京居住の作曲家を列記すると、柴田南雄（一九一六）東大卒、毎日音楽賞、交響曲「ゆく河の流れは絶えずして」他。芸大講師の末吉保雄（一九三七）東京芸大卒。パリ。

エコールノルマル音楽院卒の菅野浩和（一九二三）は、東京芸大講師、歌劇「安達ヶ原の鬼女」がある。鈴木匡（一九三四）は京都市音楽大賞を受け、交響曲、バイオリン協奏曲がある。

平義久（一九三八）東京芸大、パリ国立音楽院卒、リリープランジ作曲賞、フランス室内楽作曲大賞を受ける。武満徹（一九三〇）は国際現代作曲会議最優秀作品賞を受け、絃楽四重奏、ピアノとオーケストラ、交響曲等々の作品多数がある。丹波明（一九三二）パリ国立音楽院卒、リリー・プランジ賞、絃楽四重奏曲、管絃楽曲がある。八村義夫（一九三八）東京芸大卒、桐朋学園大講師、オーケストラとピアノのための作曲、合唱曲等がある。

服部正（一九〇八）慶大卒、歌曲集歌劇、交響曲等多数。原嘉寿子（一九三五）は東京芸大卒、パリエコールノルマル音楽院、イタリアヴェネチア音楽院、芸大講師、六重奏曲、フルートチェンバロ・弦楽のための小協奏曲。林光（一九三一）は芸術祭賞、尾高賞受賞、管絃楽のための変奏曲、カンタータ等多数。福島和夫（一九三〇）イギリス、アメリカ留学、国際作曲祭に入選。

別宮貞雄（一九二二）東大卒、尾高賞、芸術祭優秀賞、管絃楽のための二つの祈りオペラ、ヴィオラ協奏曲。牧野由多可（一九三〇）芸術祭賞受賞、芸術祭作曲賞、歌劇、狂言による「くさびら」能による「黒塚」太神協奏曲、尺八独奏曲等。

増本喜久子（一九三七）は桐朋学園大講師、作曲は、合わせものによる四つの情景、邦楽器のための小さな風、他に「雅楽——伝統音楽への新しいアプローチ」等の著書がある。松平頼暉（一九三一）は東京都立大理学部の卒業。イタリア音楽コンクール、世界音楽祭等に入選、新しい数多くの作曲がある。松平頼則（一九

〇七）は慶大中退、文部大臣賞、毎日音楽賞ローマ国際作曲コンクール一位入賞、上野学園大教授、管絃楽「右舞」「左舞」「舞楽」他、ピアノと管絃楽の主題と変奏、催馬楽によるメタモルフォーズ、フリートのための蘇真者。

三宅様名（一九四二）アメリカカジュリアード音楽院、ペンジヤミン音楽賞、作品はピアノとオーケストラのコンチェルト、絃楽オーケストラの詩曲。

三善晃（一九三三）は東大仏文科卒、尾高賞、毎日音楽賞、イタリア賞、NHK作曲賞を受ける。音楽詩劇「オンディニス」交響三章、ヴァイオリン協奏曲、絃楽四重奏曲、チェロ協奏曲等々作品が多い。諸井三郎（一九〇三）東大美学科からベルリン国立音大、交響曲一番から五番、ピアノ協奏曲、ファゴット協奏曲、チェロ協奏曲、絃楽六重奏、絃楽三重奏曲等々、ピアノソナタ、フルートソナタ、ピアノソナタ、オラトリオ「太陽のおとずれ」

諸井誠（一九三〇）は東京芸大卒、芸術祭賞、尾高賞を受ける。交響曲「偶対」「交感」ピアノ協奏曲、ヴィオリンとオーケストラの協奏組曲、尺八本曲「竹籟五章」尺八二重奏曲「対話五題」等々。山内正（一九二七）伊福部昭門下、TBS賞、絃楽四重奏曲、交響曲、ピアノソナタ、ピアノ組曲等々以上。

余白があったので、大正時代の和洋合奏の曲名を記入する。島田声普、宇賀神三津男指揮の三味線と洋楽器の合奏で、チャンバラ映画の伴奏につかたものだが、箏曲、六段と春雨以外は、長唄ばかりであった。他に短いメリヤス物も少しあった。

松の緑、勧進帳、越後獅子、小鍛冶、鶴亀、秋の色種、吾妻八景等々である。（作家）

人物を中心とした

## 文化郷土史

—神奈川県—

酒井敬一



神奈川県は東京と座敷つづきである。奈良、京都とつづきならんで鎌倉は中世文化を今に伝える古都である。江戸時代、神奈川県は東海道の宿駅として箱根の山から江戸の入口品川までをつなぐ唯一の本街道。この間に城のある町は小田原十一万石だけである。他には一万石が二つと各藩の分領、多くの旗本の知行地が複雑に入りこんでいた。鎌倉の寺と小田原の城を除くと、小さな漁村と農村の群にすぎない神奈川県には、それらしき文化というものが無い。城下町のないところ、藩風の薄いところに文化は育たない。しかし、それなればこそ、文明開化の波を素直に受け入れ西洋文明の近代都市横浜が生まれる。横浜と小田原の間の湘南地域には西洋式消費生活が成長し、やがて全国にひろがる。それから、横浜と品川の間には近代産業地帯ができて上がる。短期間のすさまじい体験をする神奈川県である。

嘉永六年（一八五三）六月、ペリーが神奈川県沖の浦賀に來たり、安政六年（一八五九）には横浜が開港する。幕府は「西洋」受け入れのため、横浜の海を埋め立て、波止場を作り、運上所（税関）を作り、堤防橋梁を整備し、河川は改修し、居留地を整備、江戸や地方商人の移住を強制し奨励した。競馬場から電信、鉄道、ガス灯、灯台までが明治五年までにでき上がる。牛肉や牛乳、西洋野菜の栽培まで始まる。目まぐるしい程の発展で、開港当時百戸しかなかった横浜の住宅が明治二十二年の市制施行時には二万五千戸に増加している。だから、三代つづいた神奈川県の人はいない。とにかくも文明開化の風を受けとめた逞しい庶民のエネルギーが、城下町にはな

新しい文化を作っていた。だから、昭和二十年八月三十日マツカーサー元師がパイプを口に、神奈川の厚木飛行場へ降りて来たときも、それ程驚きはしなかった。

## 学術

西洋文化の唯一の輸入口であったし、また東京人の別荘地、保養地でもある神奈川には、生地は別としてもここに住み活動した人、仕事している人は極めて多い。恐らく東京に次ぐものと思われる。

「福翁自傳」に福沢諭吉は書いていたことだが、安政六年（一八五九）二十六歳の彼は初めて横浜に来て悟る。もうオランダ語は役に立たない。英語の時代が来たのだと。切支丹と蘭学の長崎から英語とプロテスタント文化の横浜へ世の中は移ったことである。米国のキリスト教宣教師の活躍は大変なものであった。英語教育、キリスト教教育、女子教育、そして聖書の翻訳と現在につながる、いや現代まで支配的なものになっている文化を作りあげた。その代表がJ・C・ヘツパーン（俗にヘボン一八一五～一九二一）。ニューヨークで医師として得ていた十分な富と名声をすてて、ヘボンが妻とともに東洋伝道のため来日したのは安政六年十月である。つづいて、S・R・ブラウン、J・ゴープル、J・H・バララーが相ついで来日する。

ヘボンは医師としては名優沢村田之助の脚を手術したことでも有名だが、「和英語林集成」を八年かかって作成したとき、その編集のため考え出されたのがヘボン式ローマ字であることは一層有名である。

天野貞祐、左右田徳郎、茅誠司、小塚新一郎、吉川逸治、比企能達、柳田謙十郎、大島正徳……そして出身ではないが鎌倉の人と言える鈴木大拙と親友の西田幾多郎の名をあげたい。

## 美術

二人の人物を紹介したい。近代美術の先駆者、西洋美術の恩人ともいべき二人である。チャールズ・ワグマン（一八三二～一八九一）はイラストレイテッド・ロンドンニュースの報道画家として文久二年（一八六一）に来日する。「ジャパン・パンチ」に社会風刺の作品を発表して好評を得、ためにポナンチ絵という日本語ができたのは有名な話。彼の写実的な油絵と水彩画は恐らく日本人が初めて見る本格的洋画であった。横浜のワグマンのところに、幕末洋画最後の人であり明治洋画の最初の巨人と言われる高橋由一（一八二八～一八九四）と芳柳の息子で天才のほまれ高い五姓田義松（一八五五～一九一五）がやって来たのは慶応二年のこと。近代日本美術の最初の確立者ともいえるこの二人が挿絵画家のワグマンから学び脱け出る過程はおもしろい歴史だが省略する。小林清親、田村宗立もつづいた。ワグマンは横浜で死去した。

天心岡倉覚三（一八六二～一九一三）は横浜の貿易商の家に生まれた。十二歳までしか住んでいなかったが、この文明開化の町に生まれ育たなかったら、天心の名は別のものになっていたろう。当時の横浜は外人が多く、英会話の上手下手が商売に大きく影響していた。商人である天心の父も十分にそれを承知していたので、天心が

ろう。一方、ヘボン夫人は慶応三年（一八六七）から英語塾を開く。高橋是清、益田孝、岸田吟香の名前がある。この塾から後に明治学院、フェリス女学院が誕生した。ヘボンは明治六年キリスト教が黙認されると翌七年には早速ブラウン宅で聖書の共同翻訳にとりかかり明治十三年四月完成した。漢文体でなく日本語で書かれた労作である。新約の大部分はヘボンの訳である。ヘボンは明治学院の初代の総理であり指路教会の設立にも多大の功があった。九十六歳で彼がニュージャージー州で死去した明治四十一年九月二十一日に明治学院のヘボン館が焼失したのは奇妙な偶然である。

なお、明治八年にはフェリス和英女学院が開校するが、「小公子」「小公女」の名訳者若松駿子はその第一回卒業生である。その後にはミッションホーム（明治四年）、プリチンスクール、（明治十三年）、横浜和英学校（明治十九年）等宣教師たちの建てた学校から発展して今、横浜のキリスト系学校は約四十を数えている。（なお、果に教会は約百五十ある）有島武郎はブリチンの第一回生である。かくて、貿易の町、横浜は新しい学問、語学の中心地でもあった。

大正時代経済学界の第一人者であった左右田喜一郎（一八八一～一九二七）は浜ッ子。その学問は左右田哲学として国際的にも大変な評価を得、名譽ある帝国学士院賞も受けている。この人が銀行の頭取なのである。いかにも当時の横浜らしい話である。

\* \* \*

残念だが他の学者についてふれる程紙面に余裕がない。わずかに本県出身の先達を若干氏名だけ紹介する。岡倉天心、高橋誠一郎、

七～八歳のころから米宣教師J・H・バララー（前述）について英語の勉強を始めさせた。九歳のときは高島英語学校に通い、十二歳で早くも原書を読んでいた。この後、東京大学に在学中、芸術の師とするフェノロサに会うが、後年ボストン博物館の東洋部長に就任し英語で「東洋の理想」「東洋の覚醒」「日本の目覚め」「茶の本」などを著作し、日本美術の海外紹介に大いなる業績をあげたのも、その基礎は幼年時代の横浜にあると言える。明治二十四年東京美術学校（現東京芸術大学）の校長になり、同三十一年その職を辞するや日本美術院を設立した。横山大観、下村観山、菱田春草、橋本雅邦など明治の巨人たちはここで育った。天心をハ・マの心と言う人もいる。

五雲亭貞秀（一八〇七～一八七八）と二代広重（一八二六～一八六九）を頂点とする横浜錦絵（万延元年（一八六〇）から明治十六年ごろ）は江戸浮世絵最後のものであるが、これを完全に追い越したのが下岡蓮杖（一八二三～一九一四）である。日本画修行中の彼が横浜で油絵を学び、文久三年（一八六三）横浜で写真業を開くに至ったのは時代のせいだろう。唐人お吉の写真も彼が写した。版面がカメラによって追い退けられたのである。

\* \* \*

鎌倉彫・箱根細工等工芸関係は残念だが省略し、美術関係の人を何人か列記しておく。若い人や最近県内に移住して来た人は省く。神奈川に住み、神奈川で大きな仕事をした故人、そして現在の人。三宅克己、鳥海青児、足立源一郎、岩村透、岸田劉生、萬鉄五郎、竹内栖鳳、鍋木清方、加山四郎、長谷川潔、前田青邨、加藤栄

三、東山魁夷、有島生馬、藤井白映、宮永岳彦、村山椋多、牛田鶏村、川上澄生、金沢重治、小倉遊亀、小山敬三、片岡球子、安田靉彦、岡本太郎、山本丘人、青山義雄、朝井閉右衛門、小磯長平、里見勝蔵、中村琢二、野口弥太郎、益田義信、浜田庄司、小関利雄、井上信道、中島清之、斎藤義重、棟方志功、円鋸勝三、高田博厚、安田周三郎、寺田透、それから鎌倉の近代美術館長土方定一。

## 文 学

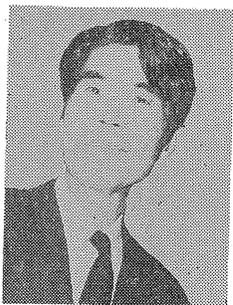
学術、美術と並んで全国に冠たるものが文学である。本県出身の作家も多い。本県出身ではないが本県人になりきっている作家はなお多い。さらに本県に取材して傑作をものにした人はもっと多い。ある意味では東京以上だろう。本県を除いては近代文学史は書けない。本県唯一の城下町であり当時文化の中心地だった「小田原地区」、ハイカラとエネルギーの町「横浜」、鎌倉文士という言葉を生んだ宗教と史跡と避暑地の町「鎌倉」と三か所に分ける。

## 横 浜

有島生馬、里見淳、小島鳥水はここ出身だが、それ以上に横浜らしいのがこれだ。白井喬二、長谷川伸、吉川英治、直木三十五、大仏次郎と横浜生まれがならぶ。当地出身ではないが、晩年を神奈川で生活し仕事した人、藤沢の子母沢寛、横浜の山本周五郎、鎌倉の林不忘(牧逸馬)とつづければ、はつきり大衆文学の系図ができる。さらに、林房雄、中山義秀、角田喜久雄、笹沢左保、八切止夫、永井路子と本県在住者がつづく。一方に横浜生まれの獅子文六、北林

透馬から、城山ダムの加藤武雄につづけて中村武羅夫、鹿島孝二、今井達夫、菊村到、宇能鴻一郎、城山三郎、そして鎌倉の吉屋信子、村松梢風、久米正雄、小島政二郎とつづけよう。

大衆文学論をこころですることはないが、フランスで一八四〇年代にA・デュマが「三銃士」「モンテクリスト伯」等を発表してから、ルパンの「ルパン」、ゾラやユーゴーの民衆文学に伝わり世界の人々を楽しませてい



吉川英治

る。日本では「大菩薩峠」(大正二年)ごろから形成されてき、大震災のころから大衆文学という呼び名が使われ始めた。本場に一般に定着したのは大正十五年、雑誌「大衆文学」が刊行されてからである。「新選組」「富士に立つ影」の作者白井喬二(一八八九-)が仏教用語の大衆(だいしゅ)から材を得てこう唱導したものである。この雑誌には長谷川、直木が白井とともに参画した。説教談義から講談という流れにそい、人生いかに生くべきかという問題に仏教の死生観と倫理感からませて説く、それは暗い貧しい庶民の生活感から生まれ、そこから脱けようとする新しいエネルギーと文明開化のハイカラさが混然とした横浜でこそ花開くものである。

芥川龍之介に認められるまでに、長谷川伸(一八八四-一九六三)は四歳で母に生き別れ、父とも別れ煙草屋の丁稚、土建屋の小

僧と苦勞した。「臉の母」「舶来巾着切」などの人情物はこの時の所産。吉川英治(一八九二-一九六三)も幼いころ行商人、丁稚奉公、職工と苦しい生活をしている。「かかん蟲は唄う」は彼の横浜ドック時代を取材したものである。大仏次郎(本名野尻清彦一八九七-一九七三)は一高、東大を出て鎌倉に移り大仏裏に住んで大仏次郎と名乗ったのだが、いつまでも横浜を愛し横浜に仕事部屋をもっていた。フランス文学の影響をうけた清新な人物観とクールな表現は新しい大衆文学を作る。「霧笛」「花火の街」「氷の階段」等は十分に明治の初期を写している。「鞍馬天狗」もたびたび横浜に遊ぶ。この大正末期から昭和初期に一斉に出て来た大仏、長谷川、吉川と獅子文六(一八九三-一九六九)(箱根山)をハマの四大作家と言っている。

〃芸術は短く貧乏は長い〃という名文句を碑に残して死んだ直木三十五(一八九一-一九三四)は「南国太平記」で歴史考証と心理描写を残し、直木賞という登竜門を残した。

長谷川伸とともに股旅物というジャンルを確立した「国定忠治」の子母沢寛(一八九二-一九六八)は、藤沢の家で「父子鷹」「おとこ鷹」を書き、山周こと山本周五郎(一九〇三-一九六七)は横浜の家で「樅の木は残った」「背へか物語」等の名作を書く。

## 鎌 倉

昭和八年久米正雄(一八九一-一九五二)が会長で〃鎌倉ペンクラブ〃ができた。久米は世話好きで賑やかずきで、鎌倉カーニバルを復興して演出し、市議員もつとめた。このペンクラブで林房



久米正雄

雄、今日出海、永井電男、小林秀雄等が集まり家族的な懇親を重ねていた。人呼んで〃鎌倉文士〃と言い、東京の中央線グループと並べて語った。当初の費用は久米、大仏、里見の三人がほとんど出していたようだ。昭和三十六年二代目会長の里見淳(一八八八-)は「会費の滞納者多し……永らく有っても無きに等しい存在」と言って散会した。有名になりすぎ、えらくなりすぎたの

だろう。第二次世界大戦中、紙はない、だから印税が入らない、と鎌倉文士は皆生活に困っていた。久米、小林や高見順、中山義秀、川端康成の音頭で皆が書物を持ちより、鎌倉八幡宮の参道わきで貸し本屋を始めた。昭和二十年五月、〃鎌倉文庫〃という店である。株主は次のとおり。

△社長▽里見、後に久米△重役▽久米、大仏、川端、小島、里見△株主▽林、横山隆一、島木健作、中山、清水寛、福永恭助、山村一平、松井翠声、片岡鉄兵、新田潤、吉屋、永井、長田秀男、岡田真吉、中村光夫、小林、夏目伸六となっている。結構もうかたようだが、やがて終戦。今度は〃出版社鎌倉文庫〃が発足し十二月には雑誌「人間」が創刊された。皆だんだんいそがしくなり、開店一年三か月で文士の貸し本屋は終わる。



北原白秋

小田原地区  
小田原出身の作家も多  
い。  
北村透谷、尾崎一雄、福  
田正夫、牧野信一、川崎長  
太郎、井上康文、荻田義  
雄、北原武夫と教えられ

る。『小田原文壇』とも呼ばれる。

明治中期になってやっと近代文学が起るが、それはロマン主義運動から始まった。その代表者が北村透谷（一八六八～一八九四）である。「文学界」の中心的存在として人間性の尊重を叫びつつながら明治二十七年自殺する。北原白秋（一八八五～一九四二）は大正七年から同十五年まで小田原に住んで『みみずくの家』をたて「雲母集」「真珠抄」などを書く。「城が島の雨」もこの時分の作である。「赤い鳥」もこの家から生まれた。小田原を除いて白秋の文学は語れない。島崎藤村も同様である。三好達治（一九〇〇～一九六四）も大正十四年から同十九年の間小田原に住んで傑作「春の岬」「千艸里」「一点鐘」などを物にした。

谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）も作家としての前半は小田原、横浜で、後半は湯河原で送った。「京都は好きだが、住むのは故郷（東京）の近くに」と言っていた。谷崎が夫人と長女を佐藤春夫に譲る事件の発端は小田原にあった。その佐藤春夫の代表作「田園の憂うつ」「お絹とその兄弟」などは横浜の生活から生まれている。

来日した米国提督ペリーの艦隊に乗っていた二組の軍楽隊である。そして、横浜には諸国の公使館、領事館が置かれ、当然それぞれに軍楽隊（吹奏楽隊）が配属されていたので横浜の居留地では洋楽が盛んに聞かれた。明治元年九月明治天皇が京都から東京へ行幸されたとき十月十一日神奈川を御通過される。そのとき、イギリスとフランスの軍楽隊が音楽を奏したと言う。やがて明治十三年文部省の音楽教育が始められることになる。この年横浜の西川虎吉が初めてリード・オルガンを試作した。明治十七年には文部省に採用された。ピアノも明治二十二年ころ西川が浜松の山葉寅楠に一步先んじて製作している。材料入手の便が横浜のほうがあったためである。このようにしてすべての点で横浜は洋楽発生の地である。現在も盛んなものがある。昭和四十九年度のピアノ生産量は日本が三十二万台、アメリカが二十四万台。世界一の量産だが、都道府県別の普及率は東京都が全所帯の一四・四パーセント、神奈川県は十三パーセント、全国平均一〇パーセントをはるかに上回る。

また、全国に合唱団体は約二千。神奈川県は約百十を数え、中国地方全体に匹敵し、他にお母さんコーラスだけでも八十以上ある。こうした神奈川の音楽人から数人ひろう。

野村光一（一八九五～）慶応大学在学中の大正五年三月、太田黒元雄、堀内敬三とともに「音楽と文学」を創刊。初めてヨーロッパの新しい音楽の紹介につとめ、音楽批評、音楽運動の先駆者となる。大正十四年当時の東京日日新聞（現毎日新聞）に専属の音楽批評家として音楽欄を担当して今日に至る。日本で最初の音楽記者で

芥川竜之介は藤沢に住んで養生していたが「河童」「或阿呆の一生」はここで書かれている。こうした人は多い。泉鏡花の「婦系図」は逗子時代の経験だし、小栗風葉の「終篇金色夜叉」、徳富蘆花の「自然と人生」「不如帰」、国木田独步の「鎌倉夫人」「運命論者」、小杉天外の「魔風恋風」も神奈川に住んで書かれたものである。

最後に、既述の人以外の本県出身者のできるだけまとめてみると、佐藤惣之助、陶山篤太郎、岡本かの子、飯田九一、野沢富美子、郷静子、宮原昭夫、前田夕暮、和田伝、中村雨紅などの名前が出てくる。

晩年を神奈川で送った人、神奈川でなくなった人に国木田独歩、高山樗牛、武田麟太郎、中原中也、島崎藤村、岸田国士、吉野秀雄、川田順、深田久弥、真杉静枝、高田保、中島敦などがある。その他にも神奈川の作家と言える人には、河上徹太郎、中村汀女、里野立子、中里恒子、北島八穂、八木義徳、堀田善衛、藤森成志、荻原井泉水、太田水穂、北條秀司、穂積鶯、大木惇夫、石塚友二、庄野潤三、河野典生、多田裕計、山室静、山代巴、竹山道雄、棟田博、本多秋五、佐江紫一、古山高麗雄、阿川弘之、五木寛之、石原慎太郎、立原正秋、福田恒存、柳山潤、小島信一、富岡多恵子、森村誠一、倉橋由美子、畑山博、山本道子それから昭和五十一年春の芥川賞の岡松和夫まで数えられる。数えこぼしの出るのが恐ろしいくらい多い。

音楽

日本人の耳目に触れた最初の西洋音楽は、嘉永六年（一八五三）

あり、また、音楽界の唯一最高の登龍門たる音楽コンクール（NHKと毎日）に、昭和七年第一回から今日まで理事として在るのは他に一人いるだけ。まさに日本洋楽の育ての親の一人と言えよう。昭和初期本格的なオペラ運動が始まる。昭和二年から放送歌劇としてスタートした。その第一回の『カヴァレリア・ルステイカー』に出演して以来、ひたすらに進んでいるのが、ハマッ子佐藤美子である。『カルメンおよし』と愛称されるのは彼女の半生をそのまま言い当てている。現在も「創作オペラ」協会を主宰している。

またフランス歌曲の正しい普及と、日本語と日本歌曲の美しさの本格的な研究にとりくんで、文部大臣芸術祭奨励賞を得、昭和三十九年には横浜市の教育委員にもなる。

奥田良三（一八九七～）は北海道生まれだが、横浜に住んで三十年近いし、師事した深田貞の作品「城ヶ島の雨」と、昭和二十五年から二十年つとめた横浜国立大学の実績からも本人はハマッ子だと主張する。

高木東六（一九〇四～）は佐藤美子の近所に住んでいる。代表作「水色のワルツ」でよく知られ、現在タレント振り袖と随筆で忙しいが、昨年は神奈川県民愛唱歌を作るなど地元でも忙しい。

小船幸次郎（一九〇七～）は昭和八年八月アマの横浜交響楽団を結成。ハイドン「驚愕交響曲」を発表して以来、アマばかりの完全編成のオーケストラ、しかもこの二月には第三百二十三回の定期演奏会を開いたのだからすさまじい。日本第一のアマオーケストラと言ひ切れよう。

村山博（一九〇八）は、堀也の方が有名だ。昭和二十九年十月朝日新聞主催の関東合唱コンクールで一般の部で横浜木曜会、大学の部で横浜国大グリークラブ、高校の部で桜丘高校合唱団が優勝した。グリーと桜丘の指揮が村山だったのに、注目を集めた。特に桜丘高校は昭和三十年を中心に十年の間に、全日本合唱コンクールで一位一回、二位三回、全日本学生コンクールでは一位三回三位六回と驚異的な成績をあげた。以来、従来の暗く重いドイツ唱法よりもイタリア風の明るく思いきったポリュームで女声の美しさを十分に發揮する村山唱法が全国の女声合唱を風びした。県合唱連盟会長。

女声といえ、日本で唯一のプロ女性合唱団の日本女声合唱団は一九五三年結成された。指揮の三宅洋一郎（一九一四）は、ハマッ子だが、夫人は二期会の三宅春恵。三宅はフェリス女学院短大の学長を最後に、今は専ら合唱団の指導に当たっている。

\* \* \*

この他の神奈川の音楽人をリストアップしてみる。

作曲では、大木正夫、尾高尚忠、橋本國彦、箕作秋吉、宮原徳次、紙恭輔、長谷川良夫、石田一郎、中村太郎、石渡日出男、小倉朗、磯部徹、中田喜直、団伊玖磨、川崎優、鏑木創、矢代秋雄、間宮芳生、多四武彦、荻原英彦、高橋悠治など。

指揮では、金子登、山田一雄、前田幸市郎、福永陽一郎、平井哲三郎、山岡重信など。

評論では、河上徹太郎、有坂愛彦、薬科雅美、渡辺護、小林利之、渡辺学而そして吉田秀和。



浅野 一 郎

ティンアターで「瀕死の白鳥」を踊ったのが初舞台。やがて、浅野セメントの社長浅野野繪一郎の好意で、横浜港の岸壁にある浅野物産の階上をけい古場にする。

唯一のバレエ・スタジオである。日本のバレエはこの人によって育てられたのである。やがて鎌倉の海岸に移り、昭和三年には日本へ帰化した。昭和十六年五月大陸の将兵慰問に行き南京で病死する。鎌倉市は彼女の功績をたたえて市民葬をとり行った。妹のナデシダ（一九〇九）は今なお元気に七里ヶ浜のスタジオでワン・ツィと声をかけて子女の教育に当たっている。昭和三十六年には神奈川文化章をうけた。服部千恵子、東勇作、島田宏、貝谷八百子、橘秋子、近藤玲子、大滝愛子、谷桃子、松山三樹子、そして藤田繁がここから出ている。

藤田繁はしばらくパヴロバの助手として大阪の松竹楽劇団で働き、大正十三年一月に本邦初演の「白鳥の湖」を振り付け上演した。昭和二年以後は独立して活躍、そのひょうひょうたる芸風はまことに貴重なもので、明治三十六年神戸出身だが戦後は神奈川の夢ヶ崎で生活し、ここで亡くなった。作品によってはこの人がいないため上演したくないという物も結構あると言われている。パヴロバの得意の演し物は「瀕死の白鳥」だが、これはサン・サーンスの

演奏家は多数であげきれない。なお、諸井三郎と下八川圭祐は県内の音楽大学の学長をしている。

舞 踊

文明開化のもたらした西洋の芸術文化の中で普及定着の一番おそかったのはこの洋舞である。明治時代は一部の階級の間に社交ダンスが出てきたことくらいで、文化という程のものではなかった。最初の事件は大正元年に起きる。イタリアのパレエ・マスター、G・V・ロシー夫妻が帝国劇場の歌劇部の教師として来日したときを洋舞の初めとする。ロシーは踊り手ではない。二十世紀最後の偉大なプリマ・バレリーナと言われたアンナ・パヴロバが来日してきたのが大正十一年の九月である。二十日間、帝劇で踊る。このときの「瀕死の白鳥」のすばらしさは、カブキ役者を含めて世人に大きな影響を与えた。初めてみたのが世界最高のバレエだった。このパヴロバより少し前に、別のパヴロバが横浜へ来ている。この人が本場の洋舞の恩人なのである。エリアナとナデシダの姉妹である。コ



ナデシダ・パヴロバ

ーカサス生まれの貴族の白系ロシア人でロシア革命のがれて日本へ来たのが大正九年である。エリアナは明治三十二年生まれ。母と妹をつれて横浜へ亡命したのである。横浜市内のゲー

「動物の謝肉祭」中の「白鳥」の曲による作品でこのように訳したのは永田竜雄の傑作である。永田は大正年間唯一一人の舞踊評論家として、批評に翻訳に大活躍した。その著作の「泰西舞踊図説」、「泰西舞踊十二講」、「ロシア舞踊大観」などは舞界の発展のための貴重な資料であった。昭和四十年九月、七十五歳で鎌倉に死亡す。

このように歴史ある神奈川だが、現在バレエを踊るのは数える程しかない。が、前述のロシーの流れをうけるモダン・ダンスのほうは、専門の舞踊家が約百二十人（これは京阪神地区合計の倍である）が江崎司、渥見利奈を中心にがっちり腕を組んで極めて活発な仕事をしている。毎年の舞踊コンクールでも東京に次ぐ好成績をあげている。

\* \* \*

邦舞のほうだが、名取の数、およそ三千人といふ舞踊人口六十二万人を数える大世帯だが、ここでは、家元だけを紹介するにとどめたい。

西川流家から分れた七々扇流は三代目花助が元気で横浜に、藤間と中村両派から学んだ藤村流の二代目鶴吉は横須賀方面で仕事をしている。

花柳寿輔の義兄徳太郎の息で泉流の家元徳右衛門と、夫君武智鉄二とともに活躍している川口流の秀子とともに鎌倉住まいである。

（神奈川県教育委員会）